

研究主題

豊かに学ぶ子どもを育てる
～読む能力の高まりを目指して～

平成 30 年 3 月

大阪市立豊里小学校

目 次

○ は じ め に

I. 研究にあたって ----- 1

1. 研究主題

2. 主題設定の理由

II. 研究の概要

1. 学年目標

2. 研究の内容

III. 研究の組織と経過

1. 研究の組織

2. 活動内容

3. 研究の経過

IV. 各学年・学級の実践

1. 第1学年	「サラダでげんき」 -----	7
2. 第2学年	「お手紙」 -----	17
3. 第3学年	「サーカスのライオン」-----	27
4. 第4学年	「ごんぎつね」 -----	35
5. 第5学年	「注文の多い料理店」-----	43
6. 第6学年	「風切るつばさ」 -----	51
7. 特別支援学級	「買い物ごっこをしよう」-----	58

V. 研究のまとめと今後の課題----- 64

○ お わ り に

I 研究にあたって

1. 研究主題

豊かに学ぶ子どもを育てる ～読む能力の高まりを目指して～

2. 主題設定の理由

本校の研究主題は、「豊かに学ぶ子どもを育てる」である。この豊かに学ぶ子を、

- ・自信をもって学習に取り組む子。
- ・主体的に取り組むことのできる子。
- ・学び続けることのできる子。

とする。

また、本校の教育目標は、「豊かな人間性とたくましく生きる力を育てる教育実践を推進する」である。校訓には、次の3点をかかげている。

- ・ねばり強い子
- ・よく考える子
- ・明るい子

このような児童の育成に向け、「わかる」「できる」「楽しい」授業の創造が求められる。この目標を達成するために、本校では、研究教科を平成27年度より国語科とした。国語科で培われる言葉の力は、各教科で言語活動を充実させるのに基礎的基本的な技能として大切なものである。そのような言葉の力は、豊かに学ぶ子どもを育てるうえで大きな支えとなるものと考える。

そこで、まずは、児童の「国語が好き」を増やすために、言語活動を通して、児童の興味・関心をここに、児童が意欲をもって主体的に取り組める単元設定の工夫を説明的な文章の読みを中心に行ってきた。その結果、昨年度の児童意識調査では、8割の児童が「好き」「どちらか」という肯定的な結果を得るに至った。

今年度は、物語文を取り上げ、児童が意欲をもって主体的に取り組める単元設定をさらに工夫していくことにする。授業を構想するにあたっては、目的に応じて読み、そこで得た知識や技能を生かし、表現してみることで、学んだ言葉の力が必要な場面で活用できるようにと考える。そのようにして自分の学びを実感することは、学習したことへの自信にもつながる。また、このような経験の積み重ねが、学び続けるために必要な言葉の力を育んでいくことになると考える。

II 研究の概要

1. 学年目標

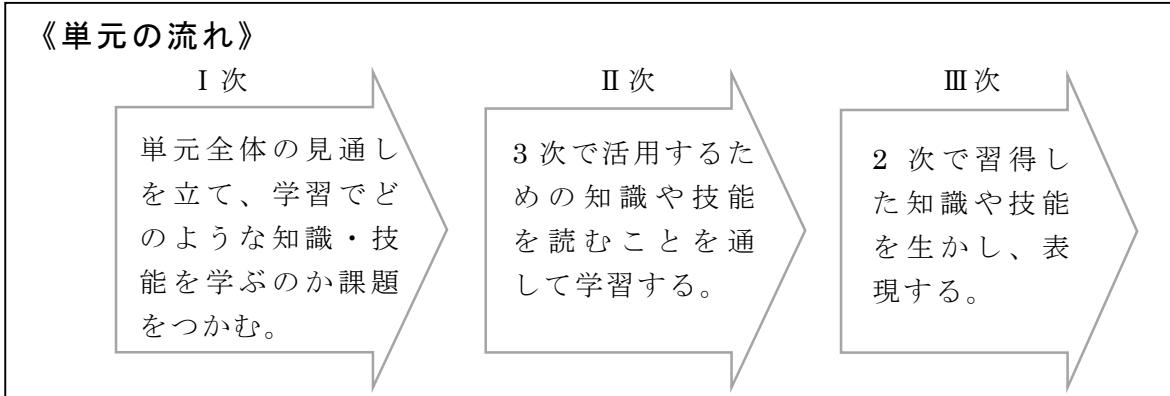
今年度は、「C読むこと」の物語を重点教材とした。そして、定着させたい知識や技能を明らかにするため、学習指導要領の指導事項を踏まえ、年間を通しての低・中・高学年の目標を以下のように設定した。

低学年	<ul style="list-style-type: none">・場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。・楽しんで読書をしようとする態度を育てる。
中学年	<ul style="list-style-type: none">・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。・目的に応じ、幅広く読書しようとする態度を育てる。
高学年	<ul style="list-style-type: none">・登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめることができる。・目的に応じ、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

2. 研究の内容

(1) 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

単元を構想するにあたっては、教材文分析と児童に付けたい力を勘案し、児童の興味・関心を引き付けられるような言語活動となるようにする。更に、教材文を読むことで得た基礎的・基本的な知識・技能を基に、それらを活用して表現活動へと展開していくように工夫した。例えば、文章の構成や表現方法、作者のテーマ性など、表現活動を行ううえで必要な技能や知識を習得するために読む。そして、学んだ知識や技能を使い、自分の言葉で表現していくというものである。また、学習活動を通してどのような言葉の力を学ぶのかということを、児童自身も課題としてつかめるように指導者が作成した作品のモデルを提示し、学習の見通しをもたせたり、学習の流れが分かる掲示物を作成し、提示したりした。以上の考えに沿う単元の流れは、次の図の通りである。



(2) 基礎的基本的な知識・技能の習得

・学習環境の整備

「声のものさし」、姿勢、話すこと・聞くことの約束、ハンドサイン、話型を全校で統一して作成し、掲示した。また、学習した基礎的基本的な知識や技能について、読むことに関わる主な内容を掲示し、必要なときに振り返ることができるようとした。

さらに、児童が日常的に、本に親しむことができるよう、当該学年の国語科の教科書に取り上げられている本を中心に学年に応じた本を選び、各教室近くにブックトラックを利用して常置した。

〈ハンドサイン〉

グー・・・違う意見 パー・・・同じ意見 チョキ・・・付け足し 一本指・・・質問

〈話すこと聞くことの約束〉

あ	相手を見て	か	顔は相手の方に
い	意見をくらべ	き	聞こえる声で
う	うなずきながら	く	口を大きくあけ
え	え顔で	け	結論から
お	終わりまで	こ	言葉ははつきり
聞こう		話そう	

〈話型〉

低	意見発表	はい・・・です。 (・・・だと思います。)
	同じ意見	○○さんとおなじで・・・です。
	違う意見	○○さんとちがって・・・です。 どうしてかというと・・・だからです。
	質問	・・・がよくわからなかつたので、もう一度せつめいしてください。 ・・・って、何ですか。

中 高	意見発表	☆ はい・・・です。 (・・・だと思います。)
	同じ意見	☆ どうしてかというと・・・だからです。 ☆ ○○さんと同じです。 ☆ それは～だからです。 ☆ ～（の資料）に～とあるからです。
	違う意見	☆ ○○さんと（少し）ちがって・・・です。 ☆ どうしてかというと～だからです。 ☆ ～（の資料）に～とあるからです。
	付け加え	☆ ○○さんに付け加えて～です。
	質問	☆ ○○さんに質問します。どうして・・・なのですか。

	☆ ~がよくわからなかつたので、もう一度説明してください
考え方を変える	☆ ~って、何ですか。
	☆ 私は~と思っていましたが、○○の考え方を聞いて、~と考えるようになりました。
考え方を比べる	☆ ○○は~だけど、△△は~だから、~だと思います。

・自分の考え方をもてるようにするための工夫

交流を有効なものとするためには、自分の考えをもって参加することが大切である。そのために、ICT 機器の活用やワークシートなどの指導材の工夫にも取り組んだ。思考を視覚化することで、教材文や本から取り出した情報を取捨選択したり関連付けたりするときなどに、考えた事を整理しやすくなると考えたからである。

・自他の考え方を交流し合うことで、思考の広がりや深まりを促す工夫

自分が読み取ったことや考えたことを交流し、自他の考え方を伝え合う場を多様に設定する。そうすることで、児童が自分の考えとの違いや読み方の違いに気づくとともに、必要な情報を取り出し、自分の考えを広げたり、深めたりすることができると考えた。それには、交流の形態を児童の実態や学習場面に応じて、適切に設定することが大切となる。例えば、ペアやグループで意見交流することにより、自分の考えを整理できたり、話すときの緊張感が緩和されたりする。また、全体交流など多数の友達で交流すると、異なる意見や自分とは違う視点での意見交流ができ、視野が広がるなど相互作用を通じての学びの機会につながりやすい。このように、様々な様態での意見交流の良さを考慮し、効果的に 1 時間の学習の中へ取り入れていくようにした。

(3) 図書の計画的な活用

読書量の充実が読む力の伸長にもつながると考え、各教材での学びをより確かに豊かなものにするために、多読にひらく活動を単元計画の中に位置付けた。図書を選定するにあたっては、必要に応じて、東淀川図書館とも連携し、団体貸し出しの利用も行うようにした。



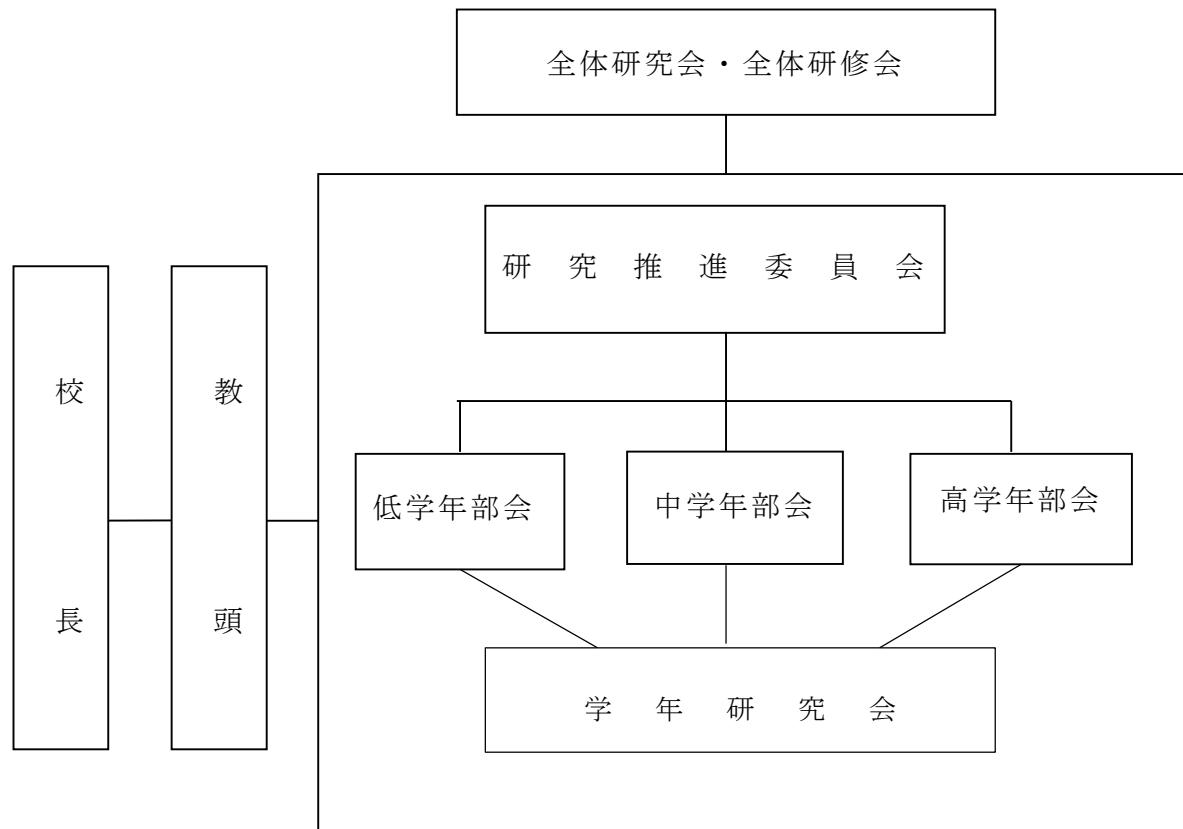
「絵本ばたけ」の様子

また、朝の「読書タイム」の設定や「自動車文庫」の利用、学年毎の関連図書の配置など、常に児童が本に親しめるような場作りを行った。更に、地域や保護者と連携した読み聞かせ「絵本ばたけ」や、図書委員会の児童による絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、本に親しむ機会を増やしていくようにした。

このようにして、図書の計画的な活用を図るようにした。

III 研究の組織と経過

1. 研究の組織



2. 活動内容

○ 全体研究会

- ・ 研究授業・研究討議会

各学年及び研究推進委員会で検討・作成された指導案により、各学年 1 名の代表者が授業を行い、全員が参加する。授業後、研究討議会において、実践についての指導法や指導計画を振り返り、成果と問題点を整理し、今後の授業研究の課題を明らかにする。

○ 全体研修会

- ・ 本校の課題や研究内容について全員で共通理解を深め、指導力の向上に努める。
(児童理解・人権教育・事例研修など)

○ 学年研究会

- ・ 研究主題をもとに各学年の研究計画を立て、授業を通して指導法を工夫する。
- ・ 隣接する 2 学年が連携し、日常の授業研究や指導法を工夫できるようにする。

○ 研究推進委員会

- ・ 研究部長、各学年 1 名の代表者、教務主任、教頭、校長で組織する。
- ・ 研究内容を明らかにし、主題に関わって研究の方向性を示す。
- ・ 指導案の検討や資料の収集・整理にあたり、各学年の実践記録をまとめる。

○ 若手研修会

- ・ メンターを中心に、5 年目までの若手教員で組織する。基本的な指導法や各自の課題について交流し、研鑽する。

3. 研究・研修の経過

月	研究会・研修会	研究・研修の主な内容
4	全体研修会	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容の共通理解
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 研究の組織と年間研究計画の作成
5	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> スポーツテストの実施について
	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 国語科学習指導研修（対話を活性化するために）
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 6年指導案検討
6	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 6年「風切るつばさ」
	安全教育実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 救急救命法
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 2年指導案検討
	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 2年「お手紙」
	メンター研修会	<ul style="list-style-type: none"> 指導力向上のために
7	3校合同実技研修	<ul style="list-style-type: none"> 外国語活動研修
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 国語科学習指導研修（教材分析）
	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育
8	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> 区人権教育講演会
9	全体研修会	<ul style="list-style-type: none"> 夏季研修等伝達講習
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 3年指導案検討
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> ICT研修
	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 3年「サーカスのライオン」
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ教室研修
10	メンター研修会	<ul style="list-style-type: none"> 国語部検証授業参観
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 1年指導案検討
11	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 1年「サラダでげんき」
	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育
	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> 区人権教育実践交流会
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 4年指導案検討
	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 4年「ごんぎつね」
	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 5年指導案検討
12	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 5年「注文の多い料理店」
1	3校合同実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 外国語活動研修
	東淀川区教員研究発表会	<ul style="list-style-type: none"> 東淀川区教員研究発表
2	研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 研究紀要原稿検討
	教育研究会総合研究発表会	<ul style="list-style-type: none"> 教育研究会総合研究発表
	実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> ICT研修
	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解
	メンター研修会	<ul style="list-style-type: none"> 授業参観・意見交流
3	人権教育研修会	<ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育
	研究推進委員	<ul style="list-style-type: none"> 次年度の研究について、新年度の計画

第1学年の実践

国語科学習指導案

指導者 石川 知奈実

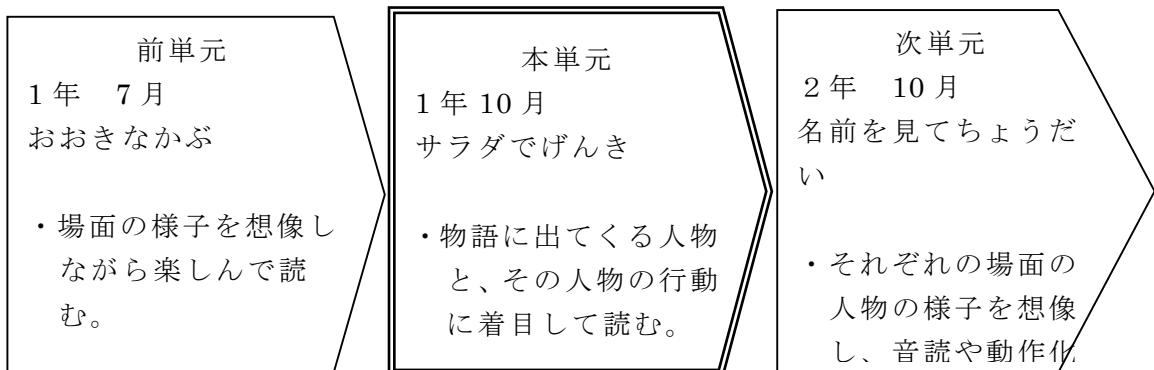
日 時 平成29年11月1日（水）第5校時（13:45～14:30）

学年・組 第1学年2組（在籍31名）

単 元 おはなしを読んで、りっちゃんに手紙を書こう。

（「サラダでげんき」 かどのえいこ 東京書籍 1年下）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 誰がどんなことをしたかを考えて場面ごとに読もうとし、興味を持ってりっちゃんに教えたいことを手紙に書こうとしている。
 - ・動物たちが出てきた順序をとらえ、それぞれの動物とりっちゃんの様子を想像して読むことが出切る。
 - ・物語を読んで分かったことをもとに、自分の考えをまとめ、りっちゃんに手紙を書くことができる。
 - ・順序に着目し、登場人物の役割をとらえることができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・物語を楽しんで読むことやりっちゃんに手紙を書くことに興味をもって取り組もうとしている。	・動物たちが出てきた順序をとらえ、りっちゃんに教えたことを読み取っている。 ・物語を読んで分かったことをもとに、自分の考えをまとめている。	・物語の人物に教えたいことを考えて、手紙を書いている。	・「誰が」「どうした」に気をつけて、文章を読んでいる。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、図書の時間や読書タイム、自動車文庫、絵本ばたけの読み聞かせなどを通して読書を楽しんでいる。また、絵本ばたけの読み聞かせで終わった後には自分の感想を口に出している児童も多い。しかし、国語の学習になると自分の考えや意見をまとめることができず感想を書くことが出来ない児童もいる。

国語の学習では、特に音読が好きな児童が多く、詩の発表会では詩にあった動作をつけたり、読み方を工夫して音読することが出来た。物語文や説明文では動作化をしながら楽しんで学習してきた。7月「おおきなかぶ」の学習で、大きなかぶを抜く場面を動作化することで、場面を想像でき、登場人物がだんだん小さくなっていると出てくる順序に決まりがあることに気が付いた。

9月「かいがら」の学習では、吹き出しを使い、登場人物の気持ちを考える活動を行った。場面の様子を想像することができず、くまのことうさぎのこの会話文を取り違えて考える児童もいた。また、くまのこの気持ちを考える活動では、自分の考えをもてない児童が数名いた。そこで、クラスで意見交流をしていくうちに友達の意見を聞くことで、自分の考えを持てる児童が増えた。しかし、場面の様子を想像できないため、気持ちを考えられない児童もまだいる。

そこで本単元では、登場人物の行動や様子を表す言葉に着目し、場面の様子を思い浮かべながら読む力をつけていきたい。

【単元観】

本単元では、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項ウ「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。」とする。言語活動を「りっちゃんに伝えたいことを手紙に書く」とことと設定した。本単元では、お母さんのためにサラダを作ろうとするりっちゃんの前に動物たちが次々と出てきて、サラダに入れる材料とその効果を教えるという楽しいお話である。動物たちの登場によって場面が分かれ、同じようなやりとりが繰り返される。

動物たちの登場の仕方（行動）、サラダにいれるとよいものとその理由（会話）が工夫されており、それぞれの動物ならではの個性が表れている。人物の行動や会話に着目して、場面をとらえて想像しながら読むのに適した教材といえる。

【指導観】

第Ⅰ次では、題名から想像されることをもとに教材文に興味を持たせる。全文を通読し、第一次感想を交流する。児童が思ったことや感じたことを把握しておくため、自分が思ったこと、気になったこと、不思議に思ったことを書かせる。その後、動物たちが順番に出てきていることを確かめ、動物がりっちゃんのサラダづくりを手伝っているということを掴ませる。そして、学習の最後には自分もりっちゃんに伝えたいことを手紙に書く活動をすることを伝え、指導者が作成した見本を見せて学習意欲を持たせる。

第Ⅱ次では、りっちゃんがお母さんのために「おいしくてげんきになるサラダ」を作ることを目的としていることを押さえる。動物が順番に出てきてりっちゃんにどんなことを教えたのかを「行動」や「会話」に着目させて読みとらせる。その際、「なんといつても」や「たちまち」など場面のようすを表す言葉を押さえておく。また、動作化を交えて言葉の表現を理解させ、想像を広げながら読み取らせるようにしたい。また、簡単な地図を用

いて動物たちの来る場所がりっちゃんの家からだんだん遠いところになっていることに気付かせたい。しろくまの場面では、今までの動物と違い電報でりっちゃんに知らせていることに着目させ理由を考えさせたい。その次のアフリカゾウの場面では、場面を読み取ったあとにアフリカゾウが最後に来た理由を考え、全体で話し合っていきたい。

第Ⅲ次では、「サラダでげんき」の学習を通して学んだことを活かし、「薦めたい材料」「それを食べるとどうなるか」を入れて手紙を書く活動を行う。その際、場面の様子を表す言葉も入れて書けるようにしていきたい。

5. 指導計画

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 題名読みを行う。 ○ 物語を通読し、第一次感想を書く。 ○ 内容の大体をとらえ、自分もりっちゃんに手紙を書くという学習の見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題名から想像されることをもとに教材文に興味を持たせる。 ・ 動物の掲示物を使って並べかえ、お話の大体をつかめるようにし、順番にでてきていていることに気付かせる。 ・ 見本を見せ、学習の最後には自分たちもりっちゃんに教えたいことを手紙に書くことを知らせる。
II 次	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ お母さんが病気になり、りっちゃんがどんなことを考えたかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「おいしくて」、「げんきになる」サラダを作ることを押さえる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねこが登場し、りっちゃんにどんなことを教えたかを読む。 (場面を分けて読む) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 語彙に気をつけて「とびこんで」や「ずらりと」などを動作化し、場面の様子がわかりやすいようにする。
	4	<ul style="list-style-type: none"> 1. ねこ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物たちが薦めた材料はどんなものか、それを食べるとどうなるかを確かめ、表にまとめる。
	5	<ul style="list-style-type: none"> 2. 犬・スズメ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物たちはどんなことを考えて材料とその効果を教えたのかを想像する。
	6	<ul style="list-style-type: none"> 3. あり・馬 ○ しろくまが登場し、りっちゃんにどんなことを教えたかを読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単な地図を用いて動物たちの来る場所を確認する。
	7	<ul style="list-style-type: none"> ○ アフリカゾウが登場し、りっちゃんにどんなことをしてあげたかを読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までの動物と同じように行動や会話などを読み取る。 ・ 「でんぼう」や「ほつきよくかい」の意味を押さえるようにする。 ・ 今までの動物と違い、白くまはなぜ電報にしたのかを話し合うようにする。 ・ 地図を使い遠いから電報にしたのだと気付かせる。
本			

	時	<ul style="list-style-type: none"> 今までの動物と同じように行動や会話などを読み取る。 「せかせか」や「くりんくりん」などの言葉に着目し、場面の様子をとらえるようする。 ぞうが最後に来た理由を考え、話し合う。 ぞうがおいしいサラダを仕上げに来ていることを押さえる。
III 次	8 9	<ul style="list-style-type: none"> りっちゃんに教えたことを手紙に書く。 書いたことを交流する。 <ul style="list-style-type: none"> 動物たちが教えてきたことを踏まえて、自分がりっちゃんに教えたことを手紙にかけるようする。 「たちまち」や「なんといっても」など本文の中の言葉を入れて書けるようする。

6. 本時の学習

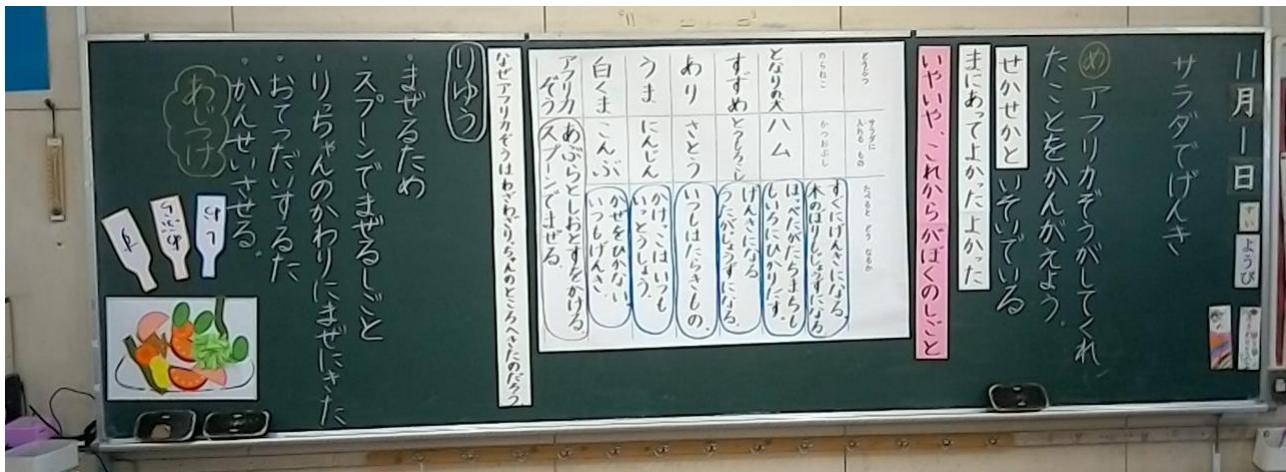
① 本時の目標

- アフリカぞうの場面を読み取り、りっちゃんのもとへ来た理由を考えることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援	
1. 全文を音読する。	○ 出てきた動物がしてくれてことに気をつけながら読むようにしましょう。	
2. 本時の課題を確かめる。	アフリカぞうがしてくれたことを考えよう。	
3. アフリカぞうの場面を読み取る。 ・アフリカぞうの場面を音読する。 ・教科書に線を引く。 ・アフリカゾウがしたことをワークシートに書く。	<ul style="list-style-type: none"> アフリカぞうがしてくれたことを考えながら読みましょう。 ▼ 「せかせか」や「まにあってよかった」という言葉に着目し、急いできた様子を押さえる。 ○ ぞうの仕事が分かるところに線をひきましょう。 ○ アフリカゾウがりっちゃんにしてくれたことをワークシートに書きましょう。 <p>★ なぜアフリカゾウはわざわざりっちゃんのところへやって来たのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アフリカゾウがりっちゃんのところへ来た理由をノートに書きましょう。 ▼ 理由が書けない子は机間指導の際に声をかける。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 隣の人に自分が書いた理由を聞いてもらいまし 	
4. アフリカゾウがりっちゃんのもとへわざわざ来た理由を考える。		

5. 理由を話し合う。 ・ペアで ・全体で	よう。 ◎ 友達の意見を聞いて付けたしてもよいことを伝える。 ○ 今日の授業でわかったこと、思ったことを書きましょう。 【評価】 アフリカゾウが来た理由について自分の考えを書くことができている。
4. 本時を振り返り、次時の予告をする。	



7. 指導を終えて

（1）学年の取組み

1年生では、活発に自分の考えを交流できるように、国語科に限らず、他の教科でも話型を掲示したり、ハンドサインを活用したりしてきた。そうすることで、なかなか発表することができない児童も、話型をたよりに発言したり、ハンドサインで賛成・反対などの意思表示をしたりできるようになってきた。さらに、友達の意見を聞いて「～さんと違って」「～さんと同じで～」「～さんに付け足して」など、児童相互の考えを活発に交流しあうための基礎的な発言の仕方が定着してきた。また、「～さんに質問で」という発言も増え児童同士の交流をする場面も見られた。その際に、「～さんの方の意見と同じだ」と友達の意見を聞いて自分と似ている考えにハンドサインで意思表示をすることができた。

また、ペアトークにも取り組んできた。(資料①)
最初は、自分の考えを書いたノートを見せ合うだけだったが、しだいに自分の書いた文を相手に伝えられるようになってきた。ペアトークという少人数での場なので、児童にとっては自分の考えを発言しやすい雰囲気であった。ペアトークを活用することで、自分の考えに自信をもつことができ、全体の場でも発言できる児童が増えてきた。



(資料①) ペアトークの様

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元では、りっちゃんに教えてあげたいことを手紙に書くという言語活動を設定した。導入でまとめとしてりっちゃんに手紙を書くことを伝えることで、書くことへの意欲付けをした。また、指導者の書いた手紙の例を見せ、単元全体で付けたい力や流れを理解させ言語活動に見通しを持たせることができた。「何をおすすめしようかな」と単元に入る前から意欲を持って取り組む姿勢が見られた。

学習を進めていく際には、イメージを持たせやすくするためにサラダの材料を用意し、授業が進むごとに増やしていった。少しづつ材料が増えていくことで学習意欲が高まった。また、地図を用いて出てきた順に動物を並べることで動物が登場する順番にも意味があるということに気づかせることができた。(資料②③) ここで本物の世界地図を見せて北極海やアフリカがとても遠いところにあることを押さえた。

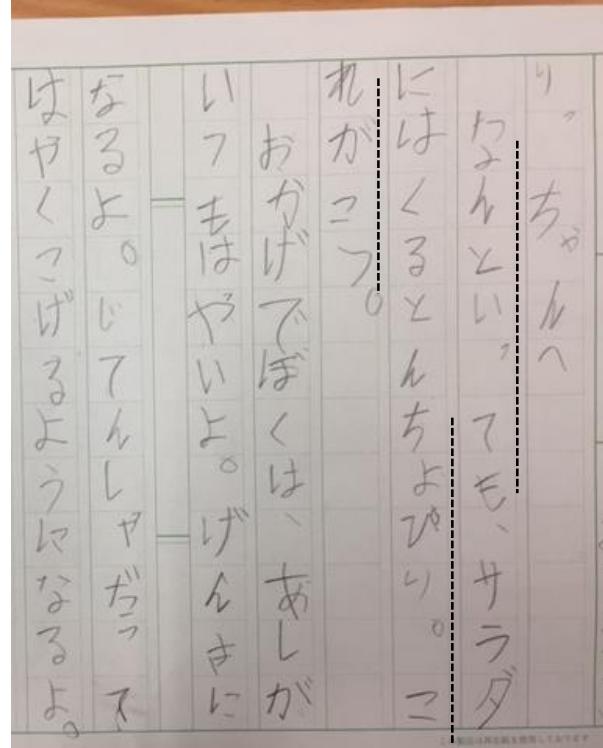


(資料② サラダを模した

本学習では、動物たちの会話に着目させ、「なんといっても」「おかげで」のようにおすすめするときに適切な表現や、「たちまち」など伝わりやすい表現を押さえて学習を進めていった。これらは、手紙を書く際食べ物の効果を強調するために活用できるものである。そのため、Ⅲ次で手紙を書くとき、これらの言葉は手がかりにすることことができた。Ⅱ次で学習したおすすめするときに伝わりやすい表現を生かし、Ⅲ次では自分がりっちゃんに教えた(資料③)につ簡易な地図に書くことを伝えていたので、文章の書き方にも抵抗なく取り組むことができた。



Ⅲ次では、Ⅱ次で学習したことをもとにりっちゃんへの手紙を書くことに取り組んだ。まず、自分がおすすめするものを考えたあと、入れるとどうなるかを考えた。「うちの家のサラダにはブロッコリーが入っているよ」や「ツナをサラダに入れよう」など自分がおすすめしたいことは時間がかからなかった。次にどうなるかを考える際は「サッカーが得意だから」や「なわとびをするのが好きだから」などⅡ次で学習したことを活用し、自分の得意なことや好きなことを効果として考える児童がほとんどだった。ただし、自分の考えを持っているが文章で表すことが苦手な児童もいたため、全体で少し話し合いをしてから自分の意見を書くようにした。すると、似た意見などを自分の言葉で書き直したりする児童が見られた。手紙を書く上で、「なんといっても」「たちまち」「おかげで」といったⅡ次で押さえた表現を使って書くことができた。(資料④)



自分の得意なことを
おすすめしている表
現を活用している。

おすすめしたいものを強調させる表現を活用している。

(資料③ 児童が書いたりっちゃんへの手

○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

本単元では、「誰がなにをした」というのを正確に読み取っていくためにワークシートを用いた。(資料⑤) Ⅱ次では、登場人物が教えてくれたこと食べるとどうなるかということが視覚的にわかりやすいように「元気になるサラダ」「おいしいサラダ」を基にして色分けをした。そして、毎時間出てきた動物が教えてくれたことはどちらのサラダになるのかを話し合った。「材料が増えているからおいしいサラダだよ」という児童に対し、「かけっこは元気にならないと出来ないから元気になるサラダだと思う」と自分の考えを述べる児童もいた。ここでは、ペアトークを用いていき、全体の場で自信をもって自分の意見を発表でき、友達との意見と比べながら理解が深まった。また、アフリカゾウの場面を「サラダにいれるもの」と「たべるとどうなるか」を一つの枠にして、今までの動物との違いを見つける手立てとした。児童から「アフリカゾウは入れたらどうなるかじゃないから枠が違うんだ」「今までの動物はおすすめにきてくれていたんだ」「アフリカゾウだけ手伝いにきてくれたんだ」と声があがり、アフリカゾウだけ役割が違うことに気付くことが出来た。

どうぶつたちは、りつちゃんに どんな ことを おしえて
くれましたか。

アフリカゾウ	白くま	うま	あり	すずめ	となりの犬	のらねこ	どうぶつ
スプーンでまぜる。	こんぶ	こんにゃく	おこし	とうもろこし	ハム	かつおぶし	入れる もの
りつまんさ。	かけひがぬ。	かけこはりつと いとうしょつ。	いもはたらきもの。	けんきになる。 うだじょうすになる。	ほ、ペたがたのまちまき、 かりだす。	すぐにけんきになる。 木のぼりたつじょうすになる。	たべると どう なるか

最後に味付けをしに
きたと分かりやすい。

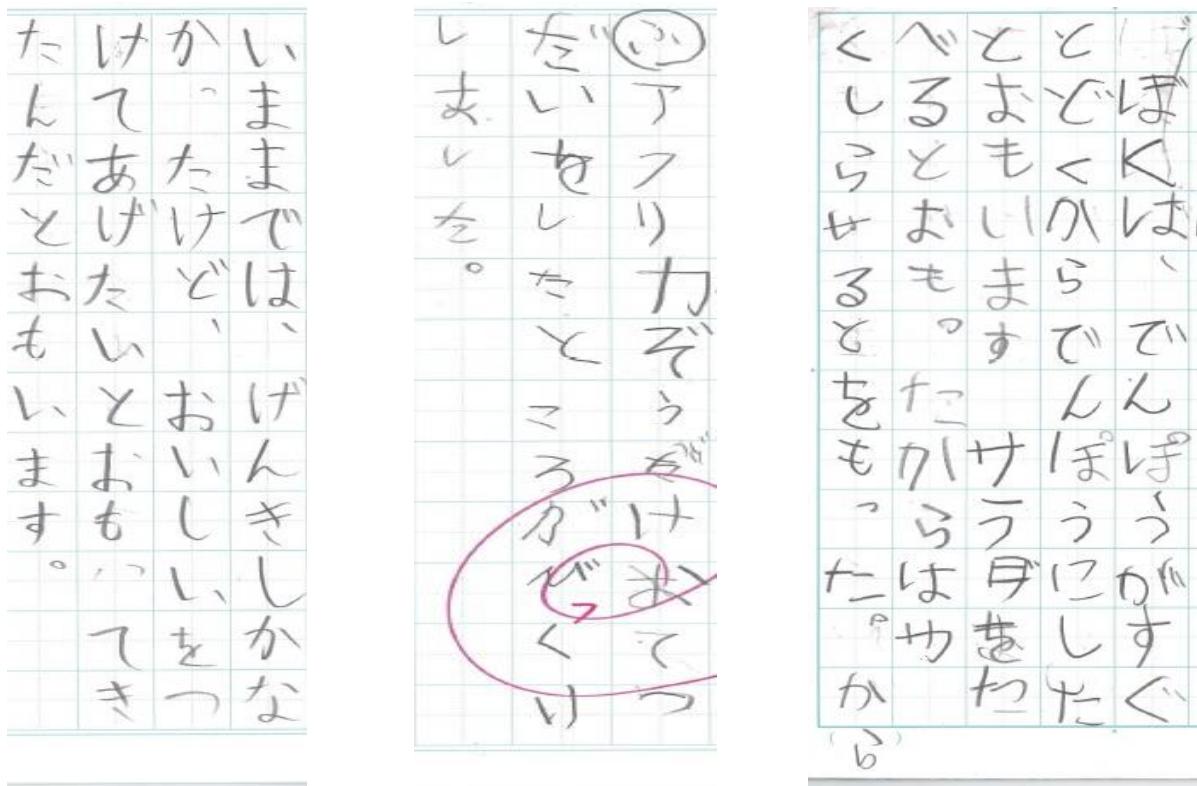
(資料⑤) 児童が書いたワークシ

教科書から必要な部分を短く
まとめて書き出している。

さらに、動物たちが出てくる場面では、「ねこはかつおぶしが好きやねん」や「海にはこんぶがあるから」と動物が選んだ材料は、動物の好みであったり、動物に関係の深いものであったりすることに気付いた。それを入れたらどうなるかには、「うまは走るのが速いから」「ぞうは力が強いから」と材料を入れた後の効果には、動物の得意なことや良い所などが入っていることに気付くこともできた。自分たちが手紙を書く際にもどんなものを薦めるのか、自分の得意なことや良い所は何かを意識づけることができた。動物たちがりつちゃんに教えてあげたものには、理由があることを学習したことや、手紙を書く言語活動においても、理由を明らかにして書く姿がみられた。手紙を書く活動のときに、活用できるように「なんといっても」や「たちまち」といったような表現の工夫に着目した。「強くおすすめしているみたい」「もっとおすすめしている」と表現の工夫の良さに気付くことができていた。

学習の終わりには、振り返りの時間を設けた。(資料⑥) 本時で分かったことや思ったことを書くよう指導してきた。「しろくまは遠くにいるので手紙じゃなくて早く伝えられる電報にしたんだと思いました。」「アフリカゾウがきておいしいサラダになった

ことが分かった。」「アフリカゾウは遠いけどおてつだいをするためにわざわざ来たんだと分かった。」など、読みが深まった児童の様子も見られた。



(資料⑥) 每時間の振り返

意見交流を活性化させるために、毎時間ペアトークを行った。話し合い活動では、ハンドサインや話型を用いるようにした。4月から継続して指導を行ってきてるので、話型を用いて、きちんと自分の意見を述べるとともに、全体交流の際に、互いの意見の同じところ、違うところを意識することで、話し合いが深まった。(資料⑦)



○ 図書の計画的な活用

(資料⑦ 全体交流の様子)

毎週の読書タイムや担任、「絵本ばたけ」、図書委員会などによる読み聞かせの機会を多く設け、本に興味を持ち、自ら進んで本を読もうとする意欲を育てた。

また、学年の廊下に書架を設けその時々の学習に関連した本をまとめて図書室から借りておき、読書タイムなどに自由に読めるようにした。その結果、積極的に本を読む児童が増え、図書館開放や月一回の自動車文庫の貸し出しを多くの児童が活用するようになってきた。本単元の学習時には、筆者である角野栄子さんの本や、「サラダでげんき」のように動物がたくさん出てくる本などを書架に並べ、並行読書コーナーを作った。

8. 成果と課題

- 指導材の工夫により、児童の興味・関心を高められ、理解をふかめることができた。
- 文章中の言葉に着目し動作化したことにより、場面の内容をよりくわしく理解することができた。
- ハンドサインを定着させることで、自分の意見を言ったり人の意見を聞いたりする態度が身についてきた。
- ▲ より活発に話し合い活動をするために、ペアやグループでの話し合いのルールを

第2学年の実践

国語科学習指導案

指導者 井田 雄太

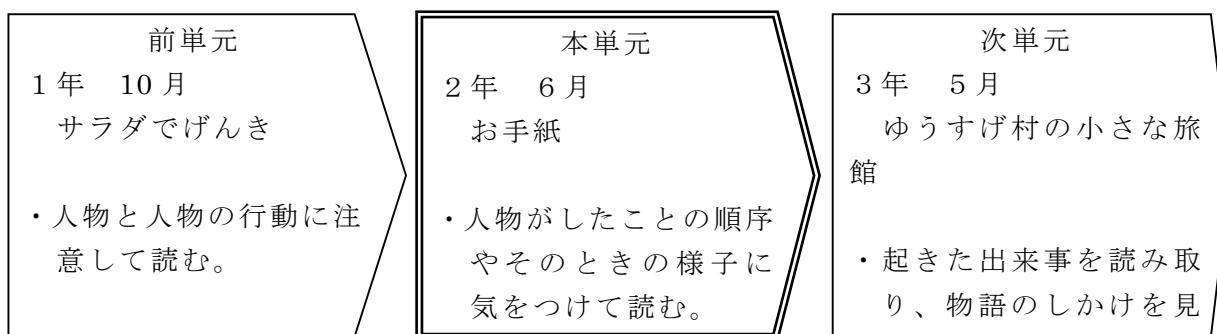
日 時 平成29年6月28日（水）第5校時（13:45～14:30）

学年・組 第2学年2組（在籍28名）

単 元 同じシリーズの物語を読んで、感想を伝え合い、読書を楽しもう。

（「お手紙」 アーノルド・ローベル 東京書籍 2年上）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 読んだ物語への思いや考えをまとめて発表し合い、読書を楽しむ。
 - ・順序に気をつけて、書かれていることを読むことができる。
 - ・場面ごとに人物の行動や様子に気をつけて読むことができる。
 - ・人物の行動や様子に気をつけて読み、感じたことを書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・物語を読むことに興味をもち、楽しんで読もうとしている。	・人物がしたことの順序を確かめ、人物の行動を中心に場面の様子を思い浮かべながら読んでいる。 ・自分の思いや考えをまとめ発表し合うことができる。	・語と語や文と文との続き方を考えて、文章を書いている。	・「誰が」「どうした」に気をつけて、文章を読んでいる。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、読書タイムや図書の時間、絵本の読み聞かせなどを通して、楽しく読む経験を積み重ねてきており、物語を読む楽しさを味わうことができるようになってきている。しかし、これまでも同じシリーズの物語を読み、楽しんだことはほとんどない。そこで、同じシリーズのお話を読み、感想を交流し合い、読書を楽しむ経験を広げていきたいと考える。

2年生の4月には物語文「風のゆうびんやさん」の学習で、人物の行動に着目して物語を読んだり、物語がいくつかの場面からできていることを学んだりしてきている。しかし、場面の中で起きる出来事やそのときの人物の行動や様子を順序よく読み取ることは、まだ十分ではない。

また、説明文「たんぽぽ」では、順序に気をつけて、書かれていることの大体を読む学習をおこなってきている。そこで、「春の晴れた日」や「次の日」などの「時」を表す言葉に着目し、たんぽぽの仕組みを順序に気をつけて読み取っていった。しかし、「時」を表す言葉を見つける際、「時」とは何なのかをまだよく理解できずに一文全てに線を引いている児童もいた。

本単元においても場面を分ける際、「時」を表す言葉に着目した上で、「場所」や「人物」にも着目しなければならないため、これらをしっかりと押さえ、人物の行動や様子を順序よく読み取っていきたい。

また、「たんぽぽ」では、たんぽぽの茎が高く伸びる理由を問うた際には、「風がよくあたります。」という本文の言葉を根拠に答えることができた児童は少なかった。

本単元では、物語の場面を捉え、場面の中で描かれる人物の行動や様子に着目して根拠をもとに考える活動を通して、読む力をつけていきたい。

【単元観】

本単元では、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項ウ「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。」とする。本単元では、言語活動を同じ人物が出てくる物語を読み、感想を伝え合うことと設定した。文章を読む中で、想像したことと自分の表現に生かすためには、出来事の展開を追うだけでなく、そのときの人物の様子や気持ちをより具体的に想像することが必要となる。それぞれの人物の気持ちの変化を知り、それを感想に書き、伝え合う活動の中で、児童の読みを深めるようにしたい。

本教材は、五つの場面から構成されている。それぞれの場面の人物の行動を中心に読むことで、出来事の順序をとらえやすい物語である。また、主に、がまくんとかえるくんの二人の行動や会話によって物語が展開しており、人物の様子や気持ちを想像させやすい。また、挿絵が効果的に配されており、物語の出来事の大まかな流れをとらえたり、それぞれの場面の人物の様子を想像したりすることに役立てることができる。

物語の展開に即して場面の様子の変化をとらえ、人物の行動や気持ちを豊かに読む能力を育てることを目指して、本単元を設定した。

【指導観】

本単元を読み進めていくにあたり、第Ⅲ次の言語活動につながるよう、同じ登場人物が出てくる物語を並行読書しながら本文を読み進めていくようとする。このとき、児童が読んだ物語を記録していくようとする。第Ⅰ次では、学習の最後には、同じ登場人物が出てくる物語を読み、その感想を書き、伝え合うことを知らせる。その際、「お手紙」以外にも同じ登場人物が出てくる物語がたくさんあり、それらを提示することで興味を湧かせたい。その後、第一次感想を交流する。この時、おもしろいと思ったところ、心に残った言葉や文を具体的に挙げると興味をもったわけが伝わりやすくなることを知らせる。その上で、これから学習していく課題を提示し、感想を書き、伝え合う活動をするために、人物の行動や様子、心情の変化に着目して読んでいくことを確かめ、学習の見通しをもてるようにならう。第Ⅱ次の場面分けでは、「風のゆうびんやさん」で学習したことを振り返り、「場所」「人物」「時間」に気をつけることを想起させる。また、挿絵をばらばらに提示し並べ替えることにより出来事の順序を確かめる方法も取り入れる。

第Ⅱ次では、がまくんとかえるくんの様子や気持ちを想像し、心情の変化などを読んでいく。その上で、がまくんの悲しい気分や幸せな気持ちをかえるくんも共有していることについてしっかりと押さえる。それぞれの場面を読む際には、繰り返し出てくる言葉や登場人物の気持ちが強くわかる言葉に注目したり、挿絵の表情などにも着目したりしながら登場人物の心情について想像できるようとする。また、登場人物の気持ちについて友だちと交流し合い自分の考えを深められるようとする。毎時間の最後には、読んだ感想を書き交流し合う。第Ⅱ次の最後には、場面ごとに書いてきた感想を一つの感想にまとめ、第Ⅲ次の言語活動につなげる。

第Ⅲ次では、「お手紙」の学習を通して学んだことを生かし、同じ登場人物が出てくる物語を読み、その感想を書き、伝え合う活動を行う。このとき、物語のどこの場面が印象的で、特にどの言葉や文が心に残ったのかを考えるようにする。最後にそれを発表し自分の発表についての感想を述べたり、友だちの発表の良かったところを伝えたりして、人物の様子や行動、気持ちの変化を読み取り、想像を広げながら読む力のより確かな定着を図る。

5. 学習指導計画（全 12 時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 教材文を通読し、 第一次感想を書く。	<ul style="list-style-type: none">・ 学習の最後には、同じ人物が出てくる物語を読み、その感想を書き、伝え合う活動を行うことを知らせる。・ 教材文を読んで、おもしろいと思ったところや心に残った言葉や文を中心に第一次感想を書くようとする。・ 人物の様子や会話を具体的に挙げ、興味を持った理由を紹介するようとする。
		○ 第一次感想を交 流する。	
	2	○ 教材文を場面ご とに分ける。	<ul style="list-style-type: none">・ 挿絵や「時」「場所」「人物」に着目するよう指示する。・ 出来事の起きた順番を確かめられるよう、挿絵

			をばらばらに提示する。
II 次 時 本 時	3	○ 誰が、どんなことをしたお話か、場面ごとに整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場面ごとに登場する人物についてまとめるようする。 ・ 五つの場面について、誰が何をしている場面かをまとめるようする。 ・ 次時からのそれぞれの場面を読む際には、整理したことを再度確かめながら進めていくようする。
	4	○ 第一場面を読み、がまくんとかえるくんは、なぜ悲しい気分なのかを考え感想をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 悲しい気分が表れている言葉に線を引きながら読むよう指示する。 ・ がまくんやかえるくんになったつもりで、どうして悲しいのかを尋ね合わせる。 ・ 読み取ったことを振り返らせ、二人の気持ちを想像しながら第一場面を音読させる。 ・ 読み取ったことを振り返り、第一場面の感想を書くようする。
	5	○ 第二場面でがまくんに手紙を書くかえるくんの様子や気持ちを考え感想をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ かえるくんの行動を示す文に線を引くようにし、かえるくんが手紙を書いて配達を頼むまでの行動をまとめるよう指示する。 ・ なぜ、かえるくんはがまくんに手紙を書いたのか考えさせる。 ・ かえるくんが急いでることに着目させるようする。 ・ 読み取ったことを振り返り、第二場面の感想を書くようする。
	6	○ 第三場面のがまくんとかえるくんの様子や気持ちを考え感想をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ がまくんの会話、かえるくんの会話を見分けられるようする。 ・ お手紙を待つことを諦めているがまくんと手紙を待っているかえるくんの気持ちに気付かせるようする。 ・ 読み取ったことを振り返り、第三場面の感想を書くようする。 ・ 第四場面でふたりが幸せな気持ちになったと思うところに線を引かせる。
	7	○ 第四場面でなぜ二人は幸せな気持ちになったのか考	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「二人とも」という一文に着目させ、なぜ二人ともなのかを考えるよう助言する。 ・ 第一場面でなぜ二人とも悲しい気持ちだったのかを思い出すようする。

		え感想をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 手紙を書いたかえるくんだけではなくがまくんも親友だと思っていることをおさえるようにする。 読み取ったことを振り返り、第四場面の感想を書くようにする。
	8	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第五場面でお手紙が届いた時のがまくんとかえるくんの気持ちを考え感想をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> かたつむりくんの「すぐやるぜ。」という言葉を思い出し、四日経ったことの面白さを味わえるようにする。 読み取ったことを振り返り、第五場面の感想を書くようにする。
	9	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第一場面から第五場面で書いてきた感想を一つの感想にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今まで読んできたことを振り返り、感想をまとめるようにし、第一次感想とどう変わったのか読み比べるようにする。
	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ まとめた感想を読み合い、自己評価、相互評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> まとめた感想を読み合い、良かったところ等を発表し合い、第Ⅲ次の言語活動につなげていく。
Ⅲ 次	11	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまで読んできた同じ人物が出てきた物語の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時まで学習した内容を振り返り、どんな言葉や表現に気をつけて、場面の様子や気持ちを考えたか思い出すよう指示する。 選んだ物語の中から、特にどこの場面が印象的だったのか考えるようする。 文章の中で見つけた心に残った言葉や文を書くようする。
	12	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感想を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 感想を伝え合う活動の中で、それぞれの読みの違いを実感させ、読書へつなげていく。

6. 本時の学習

① 本時の目標

- ふたりが幸せな気持ちになった理由を叙述をもとに考えることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時のめあてを確認する。	▼ 本時のめあてを板書し、全員で読んで確かめる。 なぜ、ふたりはしあわせな気持ちになったのか考えよう。
2. がまくんとかえるくんの様子や気持ちを想像しながら音読する。	○ なぜ、ふたりは幸せな気持ちになったのか考えながら読むようにしましょう。 ◎ 前時に引いた線を確かめさせ、新たに付け足すところがあれば書き加えて良いことを伝える。
3. がまくんが幸せな気持ちになったのはなぜなのかを考える。	★ がまくんが幸せな気持ちになったのはなぜなのか考えましょう。 ◎ 「親愛なる」を自分の言葉で表現するよう助言する。
4. かえるくんが幸せな気持ちになったのはなぜなのかを考える。 ・各自で考える。 ・ペアで交流する。 ・全体で交流する。	★ かえるくんが幸せな気持ちになったのはなぜなのか考えましょう。 ◎ 手紙の内容を聞いたがまくんだけではなく二人とも幸せな気持ちになったのはなぜなのかを考えるよう助言する。 ○ 線を引いたところでなぜ幸せな気持ちになったのかその理由をノートに書くようにしましょう。 ▼ 手紙を書いたかえるくんだけではなくがまくんも親友だと思っていることをおさえる。 ○ ペアでの交流では、友だちの良かったところを書いたり、自分の考えに付け加えたりしても良いことを指示する。 ○ なぜそのように考えたかその理由も発表するようにしましょう。
5. 学習したことをもとにし て、第四場面の感想を書く。	○ 学習したことをもとにし て、第四場面の感想を書き ましょう。 {評価} ・ 登場人物の気持ちを叙述をもとに考えることができ たか。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

言語活動を構想するに当たっては、教材研究に力を入れ、主発問や補助発問を何度も検討し、工夫してきた。本実践「お手紙」の場合では、まず、時・登場人物・場所の変わることろを根拠にし、場面分けを行った。次に、「親友」「親愛なる」「ああ」等の重要語句を見つけ、それらを手がかりにして心情や情景を考えた。そして、伏線となる描写や、出来事や表現の関連（1場面と4場面）などを検討した。このようにして行った教材文分析と児童につけたい力を勘案し、言語活動を決めるようにした。本実践では、「お手紙」と同じシリーズのお話を読み、読書会を行うことにした。単元構成は、Ⅰ次Ⅱ次Ⅲ次がそれぞれ有意に働くよう、Ⅰ次で見通しをもち、Ⅱ次で学習したことがⅢ次で表現活動に生きるような設定を考えた。そうすることで、児童の読む意欲を高め、人物の様子や行動、気持ちの変化について、叙述を基に想像を広げて読む力を育てることができると考えた。

意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫としては、話型やハンドサイン、聞き方の約束を掲示した。特に聞き方については、自分の考えと同じところ違うところを考えながら聞けるようにした。児童は、「〇〇さんと同じで～」「〇〇さんと違って～」「付け足して～」と、自分の意見と友達の考えを比較し聞けるようになってきている。さらに、学習計画を一覧にして、学習の見通しがもてるようになり、学習した内容を掲示し、必要に応じて随時振り返られるようにしたりした。また、意見交流の活性化に向け、児童が学習課題に対して段階的に思考を深めていけるように、次のように学習活動を組むことにした。まず、各自が考えをもつ時間を保証し、ノートに書く。次に、ペア交流を行い、自分の考えを声に出すことで自分の意見を確かめたり相手の意見を参考にしたりして考えをまとめる。さらに、全体で交流することを通して考えを深める。このようにして、児童が学習課題に対して段階的に思考を深めていけるようにした。

図書の計画的な活用としては、東淀川図書館と連携して集団貸出を行い、シリーズのお話を様々に楽しめるようにした。また、昔話や神話、動物に関連した本など学習した内容と関連した図書を「読書タイム」「自動車文庫」「図書の時間」などを通じていろいろな本に親しむ機会を設定してきた。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元の言語活動として、同じ人物が出てくる物語を読み、感想を伝え合う活動を設定した。

まず、第Ⅰ次では、「お手紙」以外にも同じ登場人物が出てくる物語がたくさんあることを知らせ、それらの中から挿絵やお話の一部を紹介した。児童は、もっと読んでみたいと興味を引き付けられた。そこで、学習の最後には、同じ登場人物が出てくる物語を読み、その感想を書き、伝え合う「読書会」をしようと呼びかけた。児童は、かえるくんとがまくんのお話をもっと読んでみたいと興味をもつことができていた。そして、「読書会」に向けて、人物の行動や様子に気をつけて読み、感じたことが書けるよう、同じシリーズのお話である本教材「お手紙」を読み進めていくことにした。児童は、「読書会」につながるよう、同じ登場人物が出てくる物語を意欲的に並行読書し、本教材を読み進めていった。

○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

第Ⅰ次では、これから学習していく課題を提示し、人物の行動や様子、心情の変化に着目して読んでいくことを確かめ、学習の見通しをもてるようにした。どの時間にどんな学習をするかが明確になり、家庭学習で音読を行う際にも予習をする手立てとなった。第2時の場面分けでは、「場所」「人物」「時間」に気をつけることを想起させたり、挿絵をばらばらに提示し並べ替えることにより出来事の順序を確かめる方法を取り入れたりするなかで、自分たちで場面分けを行うことができた。

第Ⅱ次では、がまくんとかえるくんの様子や気持ちを想像し、心情の変化などを読んでいった。そのために、がまくんの悲しい気分や幸せな気持ちをかえるくんも共有していることについてしっかりと押さえた。それぞれの場面を読む際には、繰り返し出てくる言葉や登場人物の気持ちが強くわかる言葉に注目したり、挿絵の表情などにも着目したりしながら登場人物の心情について想像できるようにした。また、登場人物の気持ちについて友だちと交流し合い自分の考えを深められるようにし、各場面を読むごとに感想をまとめた。このようにして、児童は、物語の各場面を読んで、自分の感じたことや考えたことを無理なく、書きためていくことができた。

(資料①②)

本時の学習では、主発問やそれに迫るための補助発問は、教材文分析を基に検討を重ね精選した。例えば、がまくんの「ああ」という言葉に児童が着目したのをとらえ、どうのような気持ちが込められているのかを考えさせた。すると、児童は「手紙を喜んでいる。」「嬉しそう。」「親友と思っている。」など、かえる君の手紙を心から喜ぶがまくんの心情を読み深めていった。するものとして、板書は、発言を順番に列挙やすいよう会話文を登場人物で色分けするなど、一目で意見交流の流れが分かるよう工夫した。ただ、本時では、手紙を喜ぶがまくんを見たかえるくんの心情についても考えさせたが、本文に心理描写がないため、心情を考えるのを難しいと感じる児童もいた。他の場面と関連付けて読むなど、想像の手掛かりをつかめるよう、更なる工夫が必要だった。

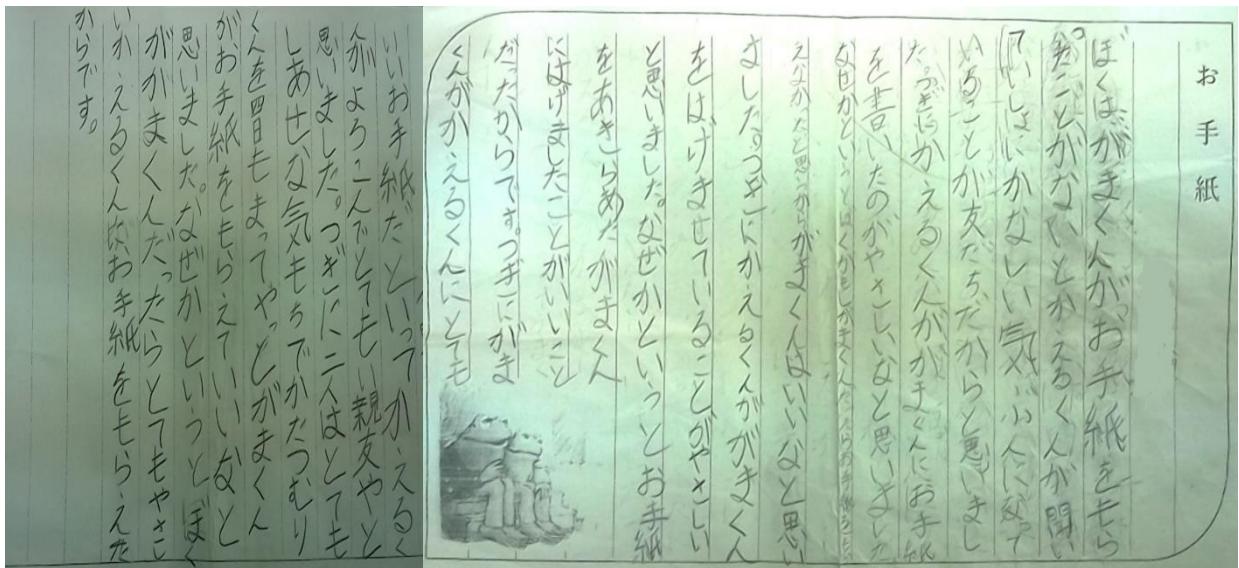
第Ⅱ次の最後には、場面ごとに書いてきた感想を一つの感想にまとめた。最後に初発の感想と最後に書いた感想を比べることにより、児童は、第1次感想より本文の大切な言葉や文を基にして、自分の考えたことや感じたことを表現する力の育ちを実感していたようである。これは、読むことに対する自信にも繋がったと考えられる。



資料② 第四場面 (本時) で書いた児童の感想
資料① 第一場面で書いた児童の感想

に、児童の思考を視覚化し、整理のではなく、二人の心情が対比しやすくなる工夫した。ただ、本時では、手紙を喜ぶがまくんを見たかえるくんの心情についても考えさせたが、本文に心理描写がないため、心情を考えるのを難しいと感じる児童もいた。他の場面と関連付けて読むなど、想像の手掛かりをつかめるよう、更なる工夫が必要だった。

(資料③)

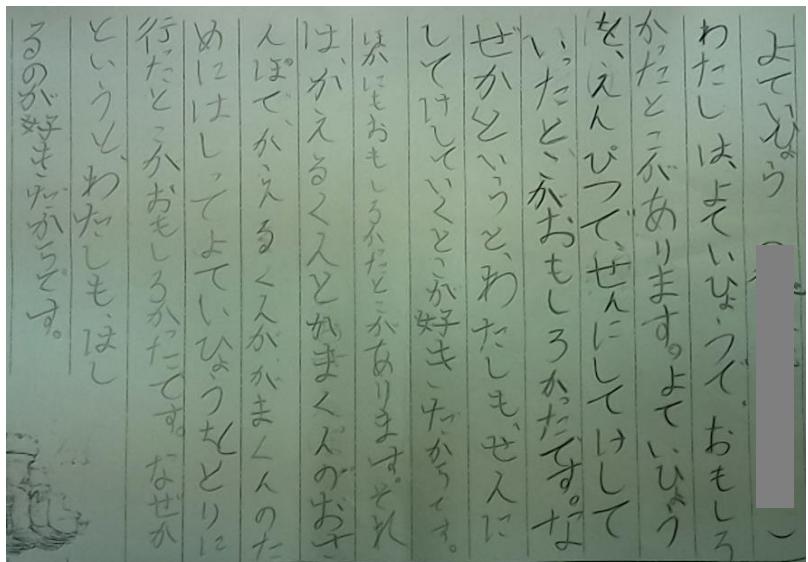


(資料③ Ⅱ次の最後にまとめた感想)

第Ⅲ次では、「お手紙」の学習を通して学んだことを生かし、同じ登場人物が出てくる物語を読み、その感想を書き、伝え合う活動を行った。(資料④) このⅢ次の学習に向けて、Ⅱ次では、各場面を読む学習の最後に、その時間で心に残った言葉や文を取り上げ、感じたり考えたりしたことをまとめるようにした。そして、Ⅱ次の最後には、書き溜めた文章をつなげ、お話を読み返したうえで推敲し書き上げた。この学習を通して学んだ方法は、Ⅲ次で、自分の選んだ物語の感想を書く学習に生かすことができた。

○ 図書の計画的な活用

かえるくんとがまくん
のお話シリーズは、計4冊
出版されている。4冊の本
は、Ⅱ次の学習と並行して
読んでいった。本は、学校
図書館にあるものを集めた
他、東淀川図書館からも集



(資料④ 三次でまとめた

(資料⑤ 物語の一覧表)

団貸出を行い、一人ひとりがいつでも手にとって読むことができるようとした。そして、その中のお話を一覧表にしてどのお話を読んだか、記録できるようにし、その中から読書交流会で意見を交流したいお話を選ぶようにした。(資料⑤)

一つのお話は短いためどの児童にとっても読みやすく、児童は意欲的に読み進めることができた。また、物語を一覧表にすることで、どのお話を読めていないかがはっきりと分かるため、読めていないお話を選んで読む姿が見られた。また、児童の中には、お気に入りのお話を何度も読み返している児童もいた。そして、Ⅱ次が終わるころには、ほとんどの児童がすべての物語を読み終えることができていた。

8. 成果と課題

- 心内語を考えさせることで登場人物の気持ちを深く読み取ることができた。
- 同じ人物が出てくる物語を並行読書したことにより、興味をもって読書に取り組むようになった。
- ▲ 登場人物の心理描写がつかみにくいところは、他の場面と関連付けて考えさせるなど、更なる工夫が必要である。

第3学年の実践

国語科学習指導案

指導者 青木 祐樹

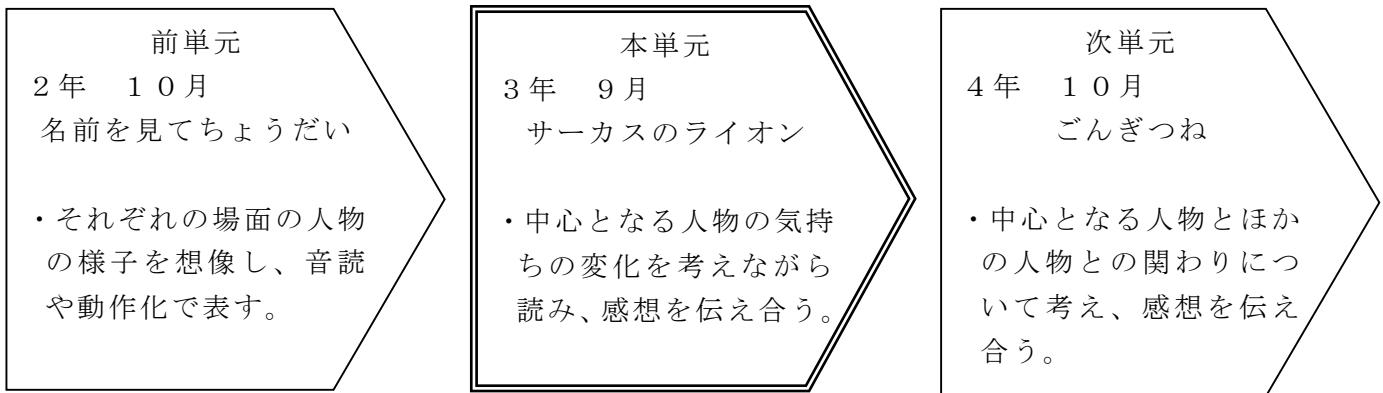
日 時 平成29年9月20日(水) 第5校時(13:45~14:30)

学年・組 第5学年1組(在籍34名)

単 元 人物の気持ちを考えながら読み、感想を伝え合おう。

(「サーカスのライオン」川村たかし 東京書籍 3年下)

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 興味を持っていろいろな物語を進んで読み、物語の面白さに気づく。
 - ・本文の叙述を基に、登場人物の気持ちの変化をとらえることができる。
 - ・主人公の気持ちの変化を考え、心情曲線に表すことができる。
 - ・物語を読んで、友達と交流する活動を通して一人一人の感じ方に違いがあることに気づくことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・物語を読み、友達と交流する活動を通して、物語の面白さに気づくことができる。	・物語を読み、場面の移り変わりに注意しながら、主人公の気持ちの変化を考えることができる。 ・物語を読んで感じたことや思ったことを発表し合い、一人一人の感じ方に違いがあることに気づくことができる。	・目的に応じて、理由や叙述を挙げつつ、自分の考えを書くことができる。	・理由を書くために必要な語句を増やすことができる。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、休み時間も自ら進んで本を読む児童が多く見られ、読書タイムや図書の時間、絵本の読み聞かせなどをとても楽しみにしている児童も多い。そのことから、好きな物語の本の中から大事な一文を選び、その一文と理由を書いた帯を作る活動を取り入れる。この活動を通して、より読書への感心を深め、国語の学習への意欲を持って学習を進めていきたいと考える。

4月教材「すいせんのラッパ」の学習では、場面の様子を思い浮かべて音読をしたり、様々なカエルの行動を動作で表し、擬態語も使いながら音読発表会を行った。ほとんどの児童が場面に合った音読の工夫を考えて表現することができ、登場人物であるかえるの絵を描く際にも文章に基づいてかえるの大きさを表現することができた。また、6月に学習した「ゆうすげ村の小さな旅館」では、人物の行動や会話に気をつけて読み、物語の中の「しあわせ」を見つけていった。第Ⅲ次では、指導者が用意したいくつかの物語の中から好きなものを選んで、「しあわせ」を使ったクイズを作る活動を行った。児童は「しあわせ」を探すことに対する興味を持ち、物語を真剣に読み込んでいたが、物語の全体の中で「しあわせ」が示唆する内容をつかむのに苦労する児童が多く見られた。また、物語の「しあわせ」が意味する内容を理解していても、クイズに使うためのしあわせを端的に表す文をうまく見つけられず、筆が進まない児童も多かった。

そこで本単元では、中心となる人物の気持ちを心情曲線に表す活動や場面ごとに中心人物の気持ちの変化を示す「大事な一文」を考えさせる活動を通して、場面の移り変わりとともに変化する中心人物の気持ちを読み取る力、叙述を基にした感想を書き、伝え合う力を身につけさせたい。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項や「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」とする。本単元では、言語活動を「物語の帯を作り、感想を伝え合う」ととて設定した。

本教材は年老いて生きがいも情熱も失い、やる気なく毎日寝てばかりいたライオンのじんざが男の子との出会いや交流を通して、失っていた生きる希望を取り戻していく物語である。場面が進むにつれ、男の子に心を寄せていくじんざの気持ちの変化が分かりやすく表現されている。

物語の構成の特徴として、叙述に時間の経過を表す言葉があり、起承転結がはっきりしていて場面の移り変わりを捉えやすい。また、一文が短く主述が明確なので、人物の言動が分かりやすい。表現の特徴としては、じんざの行動を表す文に「うきうき」「ぐうんと」「ぴかぴか」などの擬態語が多く、叙述から人物の気持ちを考えながら読むことに適した教材文である。

【指導観】

本単元の学習を進めていくにあたり、第Ⅲ次の言語活動につながるよう、中心人物の変容を読み取れる別の物語を複数用意し、並行読書を促したい。

第Ⅰ次では、「サーカスのライオン」の物語を初めて読んだ感想を、児童が大事だと思った一文を紹介し合うという形で交流させる。そして指導者が作った本の帯を見せながら

感想を紹介し、学習の見通しを持たせる。また、物語を5つの場面に分け、出来事を短くまとめた小見出しを作り、物語の全体をとらえた上で、中心となる人物の気持ちの変化を読み取っていくことを伝える。

第Ⅱ次では、まず登場人物のことが分かる言葉や文に注目し、登場人物の様子や置かれている状況を読み取る。そこからの心情の変化を心情曲線に表す活動を通して考え、読み取っていく。その際、変化の根拠となる中心人物じんざの言動を表す文を見つけさせ、特に大事だと思う一文を選ばせる。そしてその一文を選んだ理由を書かせることで、心情の変化に対する自分の考えを持てるようにならう。第Ⅱ次の最後には、物語全体のじんざの心情曲線から、どうしても伝えたい一文を「物語の中の大事な一文」として選び、本の帯を作成させる。

第Ⅲ次では、並行読書をしていた他の作品の中から気に入ったものを選び、「大事な一文」と理由を書いた本の帯を作る。そして作った本の帯を見せながら、友達と物語を紹介し合う活動を通して、読書の幅を広げさせていきたい。

5. 学習指導計画（全9時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教材文を通読し、物語の中で大事だと思う一文とそれを選んだ理由を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文を読んで、物語の中で大事だと思う一文とそれを選んだ理由を書くようにする。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一文と理由を交流する。 ○ 単元のめあてと学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれの読みに違いがあることに気づくことができるようになる。 ・ 学習の最後には本の帯を作成し、友達と交流する活動を行うことを知らせる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 場面分けをし、小見出しを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時を表す言葉に着目させて場面を分けるようにする。 ・ 場面ごとに小見出しを書かせ、物語の全体をとらえさせるようにする。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 登場人物の人物像をとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物のことが分かる言葉や文に線を引き、じんざや男の子の状況を考えさせる。 ・ 根拠となる言葉や文を基に人物像について話し合うようになる。 ・ 学習場面を音読し、じんざの気持ちを心情曲線に表させる。
II	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第二場面を読み、ライオン好きの男の子に出会った時のじんざの心情の変化を読 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 心情曲線の根拠になる一文を選ばせる。 ・ 前場面との違いに注目して理由を考える。
	4		

次 本 時	5	み取る。 ○ 第三場面を読み、男の子を眠らないで待っているじんざの心情の変化を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ一文やその理由について、心情曲線を基にペアや全体で話し合うようにする。 大事な一文や選んだ理由が変わった児童は書き加えるように指示する。
	6	○ 第四場面を読み、男の子を助けるために火の中へ飛び込んだじんざの心情の変化を読み取る。	
	7	○ サーカスや周囲の人のじんざに対する気持ちを想像する。	<ul style="list-style-type: none"> 第五場面を音読し、周囲の人のじんざに対する気持ちを考える。 物語を通してどうしても伝えたい一文を選び、感想としてまとめ、初発の感想と比べる。
	8	○ 「サーカスのライオン」の帯を作る	<ul style="list-style-type: none"> 前時で選んだどうしても伝えたい一文と選んだ理由を帶に書くようにする。 帶に書いた大事な一文とそれを選んだ理由について話し合うようにする。
	9	○ 物語の本を読んで帯を作る。	<ul style="list-style-type: none"> 前時まで学習した内容を振り返り、中心となる人物の気持ちを考えるように指示する。 選んだ物語の中から、大事な一文を選び、本の帯を作る。
	10	○ 帯に書いたことを友達と交流する。	<ul style="list-style-type: none"> 書いた本の帯をもとに本を紹介し合う。
III 次			

6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・ 少年との交流を通して変化するじんざの気持ちを叙述に基づいて読み取ることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。 第三場面のじんざの気持ちのへん化を読み取ろう。
2. 学習場面を音読する。	○ じんざの気持ちの変化に気をつけて読むよう に しましょう。 ○ じんざの気持ちを心情曲線に表してみ ましょう。
3. じんざの気持ちについて自分の 考えを持つ。 ・気持ちが表れている一文に線を 引く。 ・大事な一文を考える。 ・グループで交流する。 ・大事な一文を書き抜き、選んだ 理由を書く。	★ 第三場面でじんざの気持ちはどう変わったで しょう。 ○ 前時をふりかえり、気持ちが表れている文に線を 引きま しょう。 ▼ じんざの行動や会話文に着目して考えることを おさえる。 ○ 線を引いた文の中から、大事な一文を選びま しょう。 ○ グループで交流し、選んだ一文とその理由について 話し合いま しょう。 ○ じんざの気持ちが変わった根拠となる大事な一 文と選んだ理由を書きま しょう。 ○ 理由には、その一文から分かることや前の場面と 比較しての変化などを書くよう助言する。
4. じんざの気持ちの変化について 話し合う。 ・全体で交流する。	○ 大事な一文とそれを選んだ理由について話し合 いま しょう。 ▼ じんざの気持ちが大きく変化した文を考えさせ る。 ○ 友達との話し合いを通して、大事な一文を変更し たり理由を付け加えたりしてもよい事を伝える。 ○ 友達の考えを聞いて、心情曲線のじんざの顔の位 置を置き直しま しょう。 ○ 今日の学習をふり返って、わかったことや友だち の意見を書きま しょう。
5. 学習したことをまとめ る。 ・クラスで心情曲線を完成させる。 ・ふり返りを書く。	{評価} ・ 大事な一文を選び、それを選んだ理由をじんざの 気持ちの変化にふれながら述べることができたか。



7. 指導を終えて

（1）学年の取組み

本学年では、物語文・説明文に関わらず読みすすめる教材への関心を高めるため、元になった絵本や写真集、関連する画像などを見せることを学習の導入してきた。それにより、児童は自然とテキストや挿し絵などを読みこみ、関連する図書を見つけるなどをすることで、学習への動機を高めてきた。

また、活発な意見交流をすすめるための話型やハンドサインの活用にも取り組んできだ。児童は国語に限らず他の教科でも話型を上手くつかって自分の考えを述べたり、ハンドサインをつかって意思表示したりできるようになり、話し合いが深まる様子が見られるようになった。

さらに、たしかな読みをすすめる手立てとして、本文に線を引いて色分けし内容を分類し、その中からキーワードや大事な一文を見つけるという活動を取り入れた。そうすることで、文と文を比較し大事な部分を選びだすことができるようになり、あらすじをつかむ際や自分の考えや感想を書いたりする際に役立った。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元の言語活動として、物語の「大事な一文」と理由を書いた本の帯を作るという活動を設定した。学習に対する興味付けを図るために、じんざの気持ちを表す心情曲線や第Ⅲ次で作る本の帯を見せながら学習活動を展開するようにした。中心となる人物の気持ちの変化を読み取るために、変化の根拠となる一文を探し、その理由を考えさせるようにした。

また、まとめには学級全体で気持ちが大きく変化した一文を本文から抜き出して交流することでより深い理解につなげることができた。

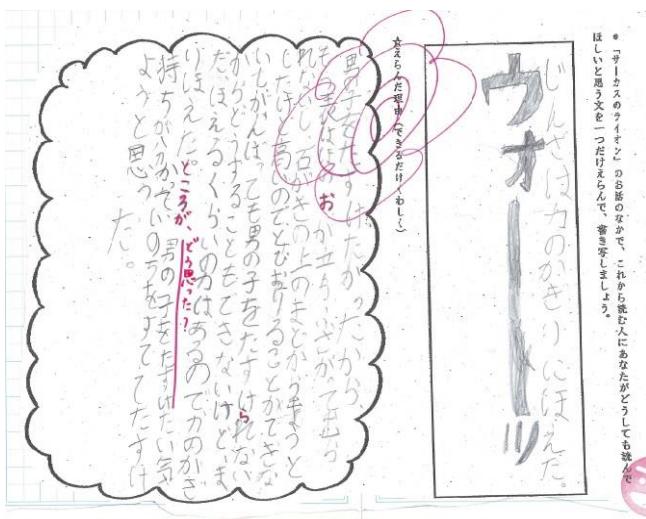
○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

本単元では、「サーカスのライオン」の学習を通じて、登場人物の気持ちの変化を読み取れるようになるため、場面ごとの「大事な一文」を見つける活動を取り入れた。授業の導入では、各場面の内容と前時までに学習した場面の挿し絵や読み取った内容を教室の前面に掲示し、これまでのじんざの心情を振り返ることで、気持ちを読み取る手立てとなつた。

気持ちの変化を見た目にも分かりやすくつかめるよう、じんざの顔をワークシートにはって心情曲線を作る活動を行った。児童は楽しんでじんざの顔の表情を描き、前場面と比べての気持ちの盛り上がりを考えて心情曲線を作ることができた。(資料①)

学習を進めていく際には、まずじんざの気持ちがわかる本文に線を引かせた。その後、気持ちの変化がわかる大事な一文をグループでの交流を経て、ノートに考えを書かせるようにした。選んだ一文とその理由をグループで話し合うことで自分の意見に確信がもてなかつた児童や考えはあるものの文章に自分の言葉でノートに書き表せない児童も友だちの意見を聞くことにより、書き出すための手立てとなつた。

また、意見交流の活発化を図るために話型やハンドサインの定着を行った。それにより全体でのスムーズな意見交流に生かすことができ、グループトークの際にも戸惑うことなく、自分の考えを交流することができた。しかしながら、全体での意見を練り上げるまでにはいたらず、発問の工夫や意見交流をする時間の確保が必要であ



(資料③ Ⅱ次でまとめたもの)

でも、「大事な一文」を見つけたり、見出した文章の内容について自分の考えを書いたり述べたりする力を生かすことができた。

場面	一 かやって サーカス きた	二 じんや か 会つ	三 男の子 か くろ	四 じんさの 氣持ち
内よう	サーカス の日 のおしま い	男の子 か くろ	じんや か くろ	じんさの 氣持ち
内よう	サーカス の日 のおしま い	男の子 か くろ	じんや か くろ	じんさの 氣持ち

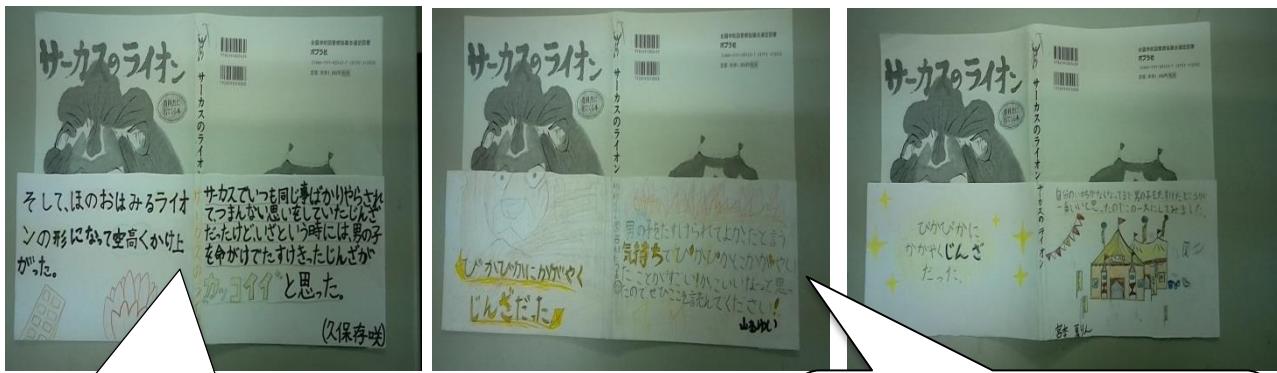
(資料① 児童のワークシート)



(資料② グループトークの様子)

Ⅱ 次の終わりには「サーカスのライオン」の絵本の帯を作る活動を行った。物語全体の中から「ぜひ読んでほしい一文」を選ぶ際、どの児童も迷いなく一文を選び、選んだ理由もそれぞれの言葉で一文が表すじんざの気持ちと、それに対する自分の思いを詳しく書けていた。(資料③④)このことからも、物語に興味を持ち、自分の感想を持って読む学習を進められたことが分かった。

「サーカスのライオン」の学習後、別の教材（「ほけんだよりをよみくらべよう」「はりねずみと金貨」など）の学習



物語の大事な一文として、じんざの気持ちの変化をとらえながら理由を書くことができた。

じんざの気持ちに寄り添いながら一文を選んだ理由を書くことができた。

(資料④ 児童が書いた本の帯)

○ 図書の計画的な活用

第Ⅲ次の言語活動につながるよう、中心人物の気持ちの変容が読み取れる物語を図書館からの集団貸し出しを利用することで複数用意し、並行読書を行った。自分の好きな作品を読み、物語の大事な一文として登場人物の気持ちが表れている一文を選び、本の帯を作って紹介し合うことができた。(資料⑤)



(資料⑤ Ⅲ次でまとめたもの)

8. 成果と課題

- 中心人物の気持ちの変化をとらえることができた。
- 交流を通して一人一人の感じ方の違いに気づくことができた。
- ▲ 発問を工夫し、学級での意見の練り合いの場面を作るようとする。

第4学年の実践

国語科学習指導案

指導者 井上 正章

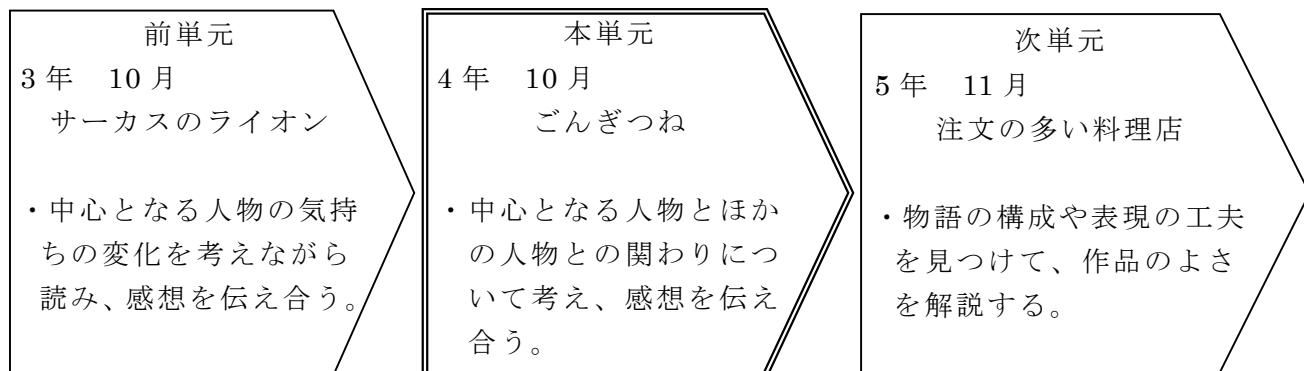
日 時 平成29年11月28日(月) 第6校時(14:40~15:25)

学年・組 第4学年3組(在籍35名)

単 元 読書会を開こう。

(「ごんぎつね」新美南吉 東京書籍 4年下)

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 中心人物とほかの人物との関わりを考えながら読み、進んで読書しようとしている。
- ・ 登場人物の心情について、場面の移り変わりに注意しながら、叙述を基に読むことができる。
- ・ 中心人物とほかの人物との関わりについて考えながら読み、感想を書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・読書を楽しみ、進んで読書しようとしている。	・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読んでいる。 ・中心人物とほかの人物との関わりについて考えながら読んでいる。	・中心人物とほかの人物との関わりについて考えながら読み、感想を書いている。	・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。

4. 指導にあたって

【児童観】

児童は、1学期初めに「こわれた千の楽器」で、工夫して音読するために登場人物の様子や心情を考えて読む学習を行った。人物の行動や様子を表す言葉、会話文に着目したり、場面のつながりを考えたりして人物の心情を想像するようにさせた。この学習では、多くの児童が人物の心情を想像しながら読むことができていたが、様子を表す言葉を見つかり、その言葉から登場人物の心情を考えて読んだりすることが難しい児童もいた。

「走れ」では、物語を「設定」「展開」「山場」「結末」の四部構成でとらえて読み取りを進めた。冒頭と結末にある中心人物の様子を表す言葉や会話文、心内語などを比較して考えることで、中心人物の変化を多くの児童が読み取ることができていた。「こわれた千の楽器」での児童の実態を受けて、様子を表す言葉から登場人物の心情を考える際に、黒板に登場人物の顔の絵を貼り、吹き出しの中に心情を書くようにしたところ、登場人物のつぶやきとして心情を考えることができた児童もいた。しかし、叙述を基にして読んだり、中心人物と関わりのある人物と結び付けて考えたりすることは、まだ十分であるとはいえない。

このようなことから、登場人物の性格や気持ちの変化について叙述を基に読み取ったり、中心人物とほかの人物との関わりについて考えて読み取ったりする力をさらに育成していく必要があると考える。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項ウ「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」とする。

本単元の言語活動は、中心人物とほかの人物との関わりを考えながら読み、感想を伝え合う「読書会」を開くこととした。この言語活動に向けて、Ⅱ次ではごんや兵十の行動の理由について叙述を基に考え、心情の読み取りを進めていく。毎時のまとめをごんや兵十に同化して書き、振り返りには感想を書いていくようとする。Ⅱ次の最後には学習してきたことを踏まえ、ごんと兵十の関係に気を付けて感想を書いて交流する。

本教材は、冒頭で伝聞の形をとった後、物語は時間の経過にそって進んでいく。「一」から「六」の場面で構成されており、場面ごとに読むことで物語の展開がつかみやすいと考える。また、一場面から五場面はごんの視点、六場面は主に兵十の視点で書かれており、視点に気を付けて読むことで人物の行動を捉えやすいと考える。さらに、人物の行動の理由から心情を考えたり、人物同士の関わりの変化を読み取ったりすることで、読みが深まる教材であると考える。

これらのことから、場面と場面のつながりに気を付けながら叙述を基に人物の心情やその変化を読んだり、人物同士の関わりについて考えて読んだりすることに適した教材であると考えられる。

【指導観】

I次では、教材文を通読した後、おもしろいと思ったところ、疑問に思ったところを感想に書かせる。感想を交流し、疑問に思ったところを話し合って学習課題を設定することで、学習への意欲を持たせたい。学習課題は児童のノートに書かせるだけでなく、教室に掲示し、学習に見通しを持って取り組めるようにする。

II次では、人物の行動の理由について叙述を基に考え、心情の読み取りを行っていく。毎時のまとめには読み取った行動の理由をごんや兵十に同化して書き、振り返りには感想

を書いていくようとする。このまとめと感想は、Ⅱ次の最後に感想を書く際に活用するようとする。

一から五場面までは、ごんの行動の理由を考えながら心情の読み取りを行っていく。つぐないをしながら兵十に対し心を寄せていくごんの心情について叙述を基に考えられるようしたい。一場面では、雨がふり続いた間あなの中にいたごんの状況や「ちょいと」という言葉に着目させ、ごんがいたずらをする理由を考えられるようとする。二場面では、ごんが見た兵十の「しおれた」顔に着目させたり、ごんがあなの中で考えたことを事実と推測に分けたりすることで、後悔にいたるごんの心情を読み取らせる。三場面では、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」に着目させ、ごんのつぐないに向かう心情に兵十への共感があったことに気付かせるようとする。四場面、五場面では兵十と加助の会話文を必要であれば誰の発言かを確認するようとする。二人の会話のどの言葉にごんが「つまらない」「引き合わない」と思ったのか考えさせることで、ごんの心情に気付かせるようしたい。六場面は兵十の行動の理由を考えて心情を読み取っていく。兵十がごんをうった理由には、兵十の心内語や行動から読み取るだけでなく、ごんの思いとのすれ違いに気付けるように一場面とのつながりに目をむけさせるようとする。また、ごんのうなずきに兵十が火なわじゅうを取り落とした時、兵十の脳裏によぎったことを考えさせることで、兵十の心情を読み取れるようする。

最後に、毎時の学習でノートに書いてきたまとめと振り返りを活用し、感想を書く。書く際にはごんと兵十それぞれの視点で読み取ってきたことや、二人の関係の変化に気を付けて書くように助言する。感想を班で交流した後、班ごとのに発表を行い全体で交流をする。

Ⅲ次では「読書会」を開き、感想の交流を行う。並行読書してきた中から本を選んで感想を書く。書く際には、中心人物とほかの人物との関わりについて考えながら感想を書くようとする。同じ本を選んだ児童で班になり、感想を交流した後、全体で交流をする。

5. 学習指導計画（全14時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 教材文を通読し、第一次感想を書く。	<ul style="list-style-type: none">「読書会」を開くことを知らせる。教材文を読んで、おもしろいと思ったところや疑問に思ったこところを第一次感想に書かせる。
	2	○ 物語の設定とあらすじをつかむ。	<ul style="list-style-type: none">時、場所、登場人物を確認する。挿絵の並べ替えをし、物語の順序とあらましをつかめるようする。
	3	○ 第一次感想を交流し、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none">感想を交流して学習課題を設定できるようにする。学習課題を教室に掲示し、学習の見通しを持てるようする。
II 次	4	○ ごんがいたずらをした理由を考える。	<ul style="list-style-type: none">視点をとらえて読み、ごんの心情を考えられるようごんの行動や様子に着目させる。「ちょいと」に着目させるようする。

	5	○ ごんが「あんないたずらしなけりやよかつた。」と思った理由を考える。	・ 視点をとらえて読み、ごんの心情を考えられるようにごんの行動や様子に着目させる。 ・ ごんの考えたことを事実の文と推測の文に分けて考えられるようにする。 ・ 後悔するごんの心情を読み取れるようにする。 ・ ごんが見たものに着目させるようにする。 ・ 前の場面と結び付けて考えられるようにする。 ・ 視点をとらえて読み、ごんの心情を考えられるようにごんの行動や様子に着目させる。 ・ 「つぐない」の意味をおさえるようにする。 ・ 「おれと同じ、ひとりぼっち」から兵十に共感するごんの心情に気付けるようにする。
	6	○ ごんが兵十のうちにくりや松たけを持っていった理由を考える。	・ 視点をとらえて読み、ごんの心情を考えられるようにごんの行動や様子に着目させる。 ・ 「つぐない」の意味をおさえるようにする。 ・ 「おれと同じ、ひとりぼっち」から兵十に共感するごんの心情に気付けるようにする。
	7	○ ごんが二人の後をつけていった理由を考える。	・ 視点をとらえて読み、ごんの心情を考えられるようにごんの行動や様子に着目させる。 ・ 兵十と加助の会話に着目して考えられるようにする。
	8	○ ごんが「つまらないな」と思った理由を考える。	・ 前の場面と結び付けて考えられるようにする。 ・ 「つぐない」の気持ちではなくなっていることを考えられるようにする。 ・ 「引き合わない」に着目させ、ごんが二人の話に何を期待していたのかを考えられるようにする。
	9	○ 兵十がごんをうった理由を考える。	・ 前の場面と結び付けて考えられるようにする。 ・ 視点をとらえて読み、兵十の心情を考えられるように、兵十の言動に着目させるようにする。 ・ くりを持ってきたごんの心情とのすれ違いに気付くことができるよう、ごんの行動に目を向ける。
本時	10	○ 兵十が火なわじゅうをばたりと取り落とした理由を考える。	・ 前の場面と結び付けて考えられるようにする。 ・ 「取り落とす」に着目させて考えられるようにする。 ・ 兵十が火なわじゅうを取り落とした時、兵十の頭に浮かんだと思うことと結び付けて考えられるようにする。
	11	○ 感想を書く。	・ 二人の関係がどのように変化したのかに気を付けて感想を書くよう助言する。
	12	○ 感想を伝え合い、交流する。	・ 班で交流した後、全体で交流するようにする。
III 次	13	○ 並行読書してきた中から本を選んで感想を書く。	・ 中心人物とほかの人物との関わりについて考えながら感想を書くよう助言する。
	14	○ 「読書会」を開き、交流する。	・ 班で交流した後、全体で交流するようにする。

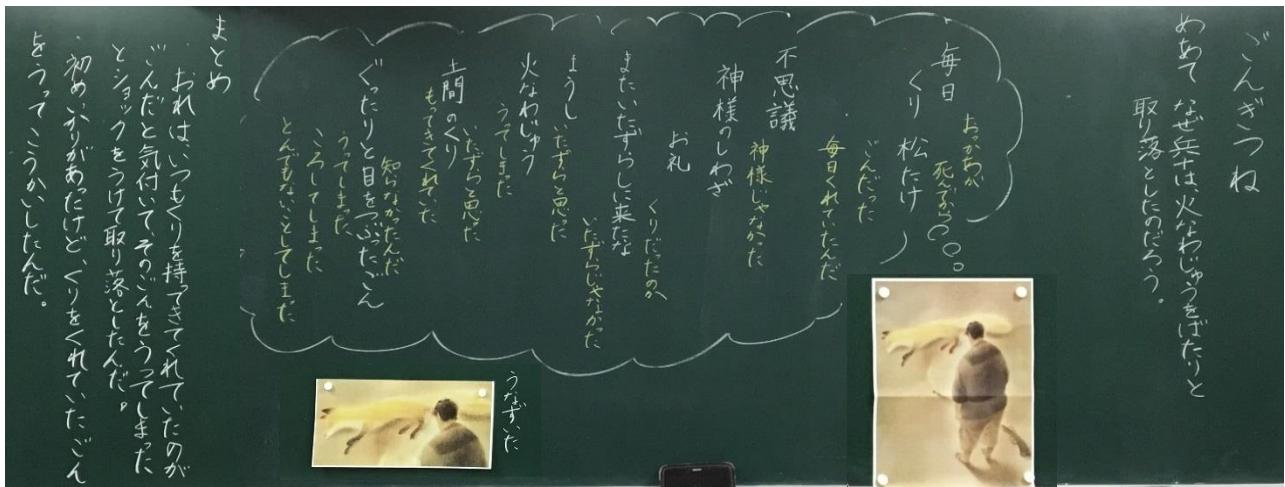
6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・ 兵十が火なわじゅうをばたりと取り落とした理由について、叙述を基にして考えることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時のめあてを確認する。	▼ 本時のめあてを板書し、全員で読んで確かめさせる。
なぜ兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としたのだろう。	
2. 教材文を読む。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 兵十が火なわじゅうをばたりと取り落とした理由を考えながら読みましょう。
3. 火なわじゅうを取り落とした時、兵十の頭の中にはどんなことが思い浮かんだのかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ★ 火なわじゅうを取り落とした時、兵十の頭の中にはどんなことが思い浮かんだのだろう。 ○ 兵十が火なわじゅうを取り落とした時、兵十の頭に浮かんだと思うことに線を引きましょう。 ○ 六場面以外のところでも探してみましょう。 ○ ノートに自分の考えを書きましょう。 ▼ 線を引いたところと、兵十が取り落とした理由を結び付けて考えられるようにする。
4. 考えたことを交流する。 ・ペアで ・全体で	<ul style="list-style-type: none"> ○ 考えたことについて、発表をしましょう。 ▼ 自分の考えたことを伝えるだけでなく、友だちの考えたことを認められるようする。 ▼ 友だちの考えたことを自分の考えたことに付け加えて良いことを伝える。 ▼ 兵十が火なわじゅうを取り落とした時、頭に浮かんだと思うことと、取り落とした理由を結び付けて考えられるようにする。
5. まとめを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ○ まとめに自分の考えたことを書きましょう。 ▼ 交流したことから考えられるようにする。
6. 学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感想を書きましょう。 ▼ 学習した場面を振り返り、感想を書くようにする。 <p>{評価}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 兵十が火なわじゅうをばたりと取り落とした理由について、ごんの行動と結び付けてまとめることができたか。



7. 指導を終えて

（1）学年の取り組み

4月当初より、話すこと・聞くことの約束やハンドサイン、話型を常掲し、どの教科でもハンドサインや話型を使って発表するように促してきた。そのため、各自が考えを発表する際には、理由と根拠を述べるように促し、本文を根拠にして、理由を明らかにしながら自分の考えを発言する仕方が身についてきている。また、交流する際には、自分の考えを発表するだけでなく、友だちの意見を自分の考えと比べながら聞くように促し、考えを深めるようにしてきた。「～さんと同じで」「～さんと違って」「～さんに付け足して」「～さんと似ていて」などの話型を用いて、友だちの意見と自分の考えを関連させて発言できる児童も増えてきている。

国語科の物語文の学習では、毎時間の学習の流れを、①めあての確認、②各自で読み取り、③少人数での交流、④全体交流、⑤まとめ、⑥ふりかえりというようにして、児童が1時間の学習に見通しをもって取り組めるようにしてきた。必要に応じて、少人数での交流を通して自分の考えを相手に伝えることで、考えを整理したり、まとめたりすることができ、全体交流で発表しやすくなるものと考えられる。

図書の活用については、国語科だけでなく、社会科の調べ学習や図工科の絵を描く際の資料など、図書館で必要な図書を探し、活用するようにしてきた。また、教科を問わず気になった語句の意味調べをいつでもできるように、教室に辞書を人数分用意して常置したり、作文指導に学級文庫を活用したりしてきた。このことにより、語句の意味調べをしたり、新出漢字の熟語を調べたり、作文の参考に本を読んだりするなど必要な図書を探し、活用しようとする児童の姿が増えてきている。

（2）本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

登場人物の性格や気持ちの変化について叙述を基に読み取ったり、中心人物とほかの人物との関わりについて読み取ったりする力を育成したいと考えた。そのために、本単元の言語活動を中心人物とほかの人物との関わりを考えながら読み、感想を伝え合う「読書会」を開くこととした。

まず、第一次感想で児童の書いた感想と疑問に思うところを一覧にまとめ全体交流をした。児童が「こんな感想もあるんだな。」と、友だちの書いた感想や疑問に興味をもって読む姿が見られた。

次に、児童から出た疑問を、「考えても解決できないもの」「すぐに解決できるもの」「学習を通して解決していくもの」に分け、単純な読み違えなどは、その場で解決していった。すぐには解決できない疑問については、みんなで読み取りを進めていく中で解決しようと提案し、疑問から毎時間のめあてを考え学習計画を立てるようにした。それらの取り組みから、「疑問が解決したら、もっと感想が書けるかも。」「友だちの感想を読んでみたい。」と、学習を通して疑問について考え、自分の感想を深めたり、友だちと感想の交流をしたりすることに意欲的な児童が見られた。

○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

I 次では、教材文の通読後、物語の流れを思い起こしながら挿絵を並べ替える活動を行った。挿絵の順序を変えて提示し、並べ替えていく中で、だれが何をした場面かを意識できるように児童の発言を板書していくようにした。人物と出来事に着目しながら挿絵を並べ替えることで、視覚的にあらすじをつかむことができた。

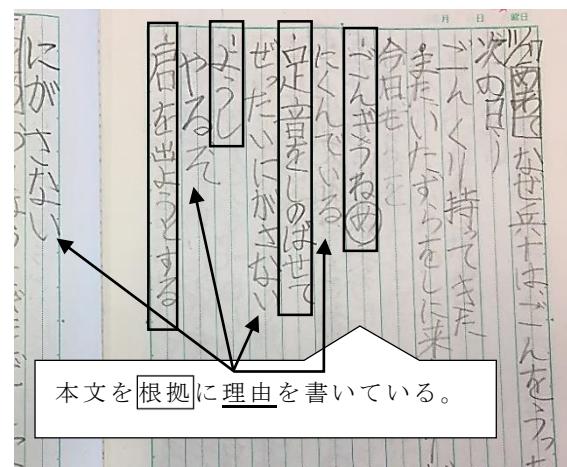
学習の見通しを持てるように学習計画を教室に常掲した。物語の展開に即して挿絵を並べ、その下にめあてを掲示することで、児童は物語のあらすじを常に確認することができた。また、学習を進めていく中で、毎時間の学習のまとめを学習計画に付け足すようにし、学習を振り返ることができるようにした。このことにより、児童は前の場面とのつながりを考えたり、人物の心情の変化を意識することができた。(資料①)



(資料① 物語の展開に即した学習計画)

II 次では、場面毎に人物の行動の理由を考え、人物の心情を読み取っていった。めあてを「この時の気持ちを考えよう」ではなく、「なぜごんは～したのだろう」「なぜ兵十は～したのだろう」など、人物の行動の理由を考えるように設定した。このことにより、根拠となる文や言葉を探す基準が明確になり、根拠となる言葉や文を考えることが苦手な児童も、自分なりに根拠であると考えられる箇所を探し本文に線を引きやすくなっていた。そして線を引いた箇所を根拠とし、理由を考えノートに書くように指導した。ノートに理由を書く際には、人物の心内語を想像し、人物の心のつぶやきのように書くようにした。「この時、心の中でどんな風につぶやいたかな。」と人物になったつもりで考えられるように支援をすることで、書くことが難しい児童も、自分の考えを書くことができていた。(資料②)

まとめでは、めあてに対応した文型(「おれは・・・という理由で、～したんだ。」「おれが～したのは、・・・だからなんだ。」)を示し、人物に同化して書くようにした。このことにより、文章を書くことが苦手な児童も登場人物の心情を自分の言葉で表現し、めあてに応じたまとめを書くことができた。(資料③) まとめで人物に同化して行動の理由を書いた後、ふり返りには客



(資料② 根拠と理由を書いた児童のノート)

観的な感想を書くようにした。学習場面毎に感想を書きためていくことで、感想の交流に活用できるようにした。(資料④)

考えを交流する際には、根拠を明らかにしながら自分の考えを話すように指導した。また、「～に線を引きました。理由は～です。」といった話型を用いることで、話すことが苦手な児童も自分の考えを伝えることができていた。

Ⅱ次での物語の読み取りでは、一から五場面を中心人物であるごんの視点で読み進め、六場面を兵十の視点で読むようにした。そのようにめあてを設定することで、「中心人物」「関わりのある人物」両者の視点で読むことになり、感想が深まると考えた。また、11時の感想を書く際には、「ごんについて」「兵十について」「結末について」の三つの視点で書くようにした。このことにより、初発の感想では「ごんはうたれてかわいそうだった。」など、ごんについての感想がほとんどだったが、「うつてしまつた兵十もショックだったんだろう。」「二人が分かり合えたらよかったですのに。」など感想の変化が見られた。Ⅲ次の感想では、「中心人物について」「関わりのある人物について」「結末について」の三つの視点で書くワークシートを用いた。児童は「赤おについて」「青おについて」、「島ひきおについて」「島の人たちについて」など中心人物と関わりのある人物を捉え、それぞれの人物の視点を考えて読むことができていた。

○ 図書の計画的な活用

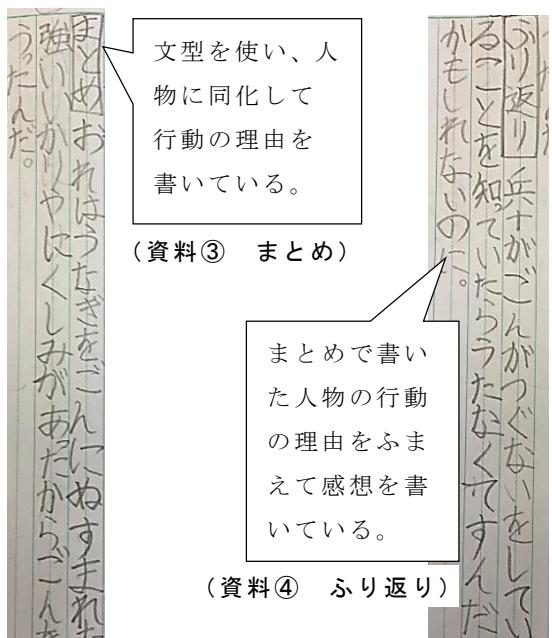
Ⅲ次の読書会に向けて、学級文庫や学校図書館を活用した。図書の選定は、中心人物とほかの人物の関わりが読み取りやすい物語を選んだ。児童は中心人物とほかの人物が誰なのかを考えながら読むことができていた。またそれぞれの立場を踏まえて感想を書き、交流することができていた。

8. 成果と課題

- 中心人物とほかの人物との関わりを考えながら読むことができた。
- 視点を捉えて読むことで、感想を深めることができた。
- 話型が定着し、児童が自分の考えを発表することができた。
- ▲ 児童が課題に取り組みやすくするため、補助発問を工夫する必要があった。

並行読書で用いた図書

・島ひきおに	偕成社
・島ひきおにとケンムン	偕成社
・泣いた赤おに	ポプラ社
・おにたのぼうし	ポプラ社
・てぶくろをかいに	ポプラ社
・花のき村と盗人たち	小学館
・おれはティラノサウルスだ	ポプラ社
・九ひきの小おに	ポプラ社



第5学年の実践

国語科学習指導案

指導者 杉浦 明日香

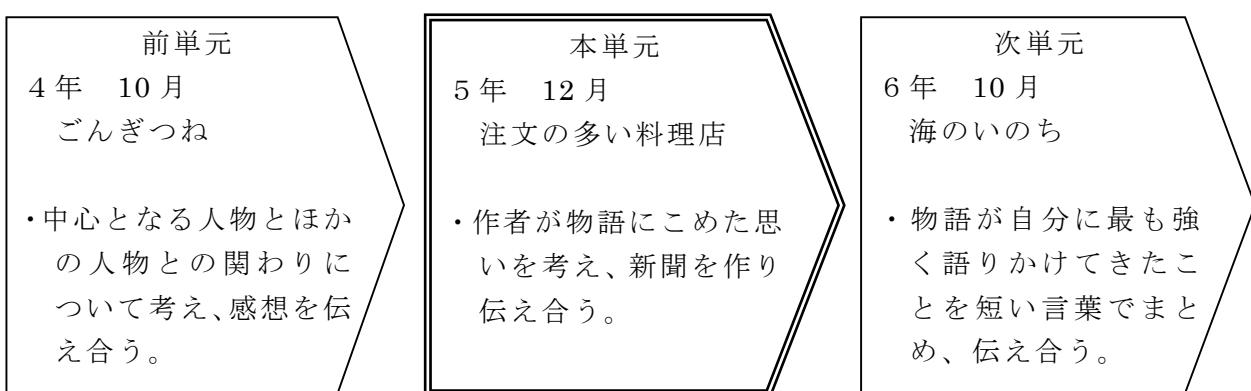
日 時 平成29年12月8日（金）第5校時（13:45～14:30）

学年・組 第5学年2組（在籍34名）

単 元 宮沢賢治が作品を通して伝えたかったことについて考え、新聞を作ろう。

（「注文の多い料理店」 宮沢 賢治 東京書籍 5年）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 宮沢賢治が伝えたかったことについて考えながら物語を読み、新聞を作つて自分の考えを伝えることができる。
- ・登場人物の相互関係や心情、場面についての描写に着目して読み、自分の考えをまとめることができる。
- ・宮沢賢治の伝記と関連づけて、作品を読むことができる。
- ・宮沢賢治の他の作品も読み、読み取ったことや考えたことを新聞に書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・作者の思いについて新聞を書くことに意欲を持ち、目的を持って読もうとしている。	・物語の構成をとらえ、物語のおもしろさを生み出す優れた表現を見つけて、自分の考えを形成している。 ・目的に応じて、本や文章を比べて読んでいる。	・新聞にまとめるために、簡潔で分かりやすい文章を書いている。	・物語の構成の工夫や比喩、反復などの表現の工夫に気づいている。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、話し合いや討論などの活動ではテーマに対して根拠をもって、自分の考えを述べることに意欲的に取り組むことができた。しかし、説明文や物語文の学習では本文を根拠に、自分の考えを表現することに戸惑う児童もいる。

6月に学習した前単元「世界でいちばんやかましい音」では、物語の構成をとらえ、山場で起きた変化について考えることに取り組んだ。ここでは、物語を全体を通して読み、中心人物の様子・町の様子を始めと終わりで、どのように変わったのかを考えた。そして、その変化をもたらしたものはどこなのかを考えた。児童は物語全体を読み返し、変化をもたらしたきっかけが、どこにあるのかを探すことができた。そして、活発に意見交流をすることができた。Ⅲ次では、これまでに学習した教材で山場を見つけることに取り組んだ。児童は意欲的に学習に取り組んだが、学級全体で考えたため、一人一人が物語の構成や表現の工夫を見つけるまでには至らなかった。この単元の学習の際に、指導者が作者について話す機会を設けた。すると、児童は作品と作者の思いを関連付けることに興味を持つことができた。こうした活動を受けて、本単元では作者の生き方や考え方を伝記を読んで知り、それらと作品とを関連付けながら読む力を養っていきたい。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項エ「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」とする。この力をつけるために、「作者が伝えたかったことを新聞に書く」という言語活動を位置づける。

本教材は、現実の世界、不思議な世界を行き来するファンタジーの構造を持つ物語である。また、題名や料理店の「戸」の言葉に二つの意味が隠され、それが物語全体の大きな仕掛けとなっている。さらに、色彩を使った表現や擬声語・擬態語なども用いられ、物語世界にひき込む工夫が多くある。このように、児童が楽しんで読み進めることができる物語であり、物語の良さやおもしろさを生み出す工夫を探しやすい教材である。児童は、次々繰り出される山猫の注文の面白さに惹かれ、二人の紳士の反応に興味を持ちながら、人物のものの考え方や心情を読み取っていくことができる。中心人物である二人の紳士は動物の命を何とも思っておらず、見た目ばかりを気にする紳士である。しかし、最後に紳士の顔はくしゃくしゃになり元に戻らなくなってしまう。これは、先に学習した伝記「宮沢賢治」に書かれていた賢治の理想である「人間も動物も自然も一つになって、心を通り合わせることのできる世界」、すなわち、「まことの幸せ」に関連している。自己中心的な紳士の変化を考えることで「動物（命）を大切にしてほしい」という賢治の思いに気づくことができるだろう。このような点において、本教材は、作者の伝記と物語を関連付けながら読み進めるのに適している。

この単元では、Ⅲ次に宮沢賢治の考え方や生き方、その作品を通して作者が伝えたかったことについて新聞を書く。新聞には、宮沢賢治の理想と、それが表れている物語の場面、そう考えた理由を書くことで、自分の考えを根拠をもって表現することができる。

【指導観】

本単元では、教材文を用いて、宮沢賢治の伝えたかったことを考えさせる。それが、ほかの物語でも表れているのかを多読を通して考え、新聞に書き、交流する活動を設定する。

そのため、宮沢賢治の書いた作品を並行読書させていく。

I次では、学習の見通しをもつたために、指導者が作成した「新聞」の見本を提示する。また、教室にはこれまでに学習した宮沢賢治の理想や考えを短冊に書いておき掲示しておくことで、いつでも振り返ることができるようとする。本教材を読んだ後、初発の感想を書かせる。その際には、「面白いと思ったところ」「不思議に思ったところ」「作者に聞きたいこと」などの観点を挙げ、簡単にまとめることができるようとする。児童の感想は一覧のプリントにし、感想を色分けして学習課題を設定する。自分たちで学習課題を設定することで、学習に対する意欲を持たせたい。そして、本作品を特徴づけているファンタジー性に着目し、現実→不思議な世界→現実という三つの場面に分かれていることを読み取らせる。この時、「風がどうとふいてきて」という表現に着目させる。

II次では、二人の紳士の言動を通して、紳士の人柄や性格、考え方など人物像を読み取っていく。その際、第一場面の本文を書いたワークシートを用いて、紳士の人物像を書き込むようとする。人物像を読み取ることが困難な児童には、この紳士と友達になりたいかを質問し、その理由を問うことで人物像をとらえやすくする。辞書の「紳士」の意味と登場する紳士の人物像を比べ、全く異なっていることに注目させる。次に、戸に書かれた注文と、それに対する紳士の解釈の違いについて読み取る。その際、それらを比較しやすいように、ワークシートを用いて学習する。

本時では、二人の紳士が始めと終わりで変わったところと変わらなかつたところを考えさせる。顔が紙くずのようにくしゃくしゃになったが、気取っている・命を何とも思っていない性格や考えは変わらないままであることをおさえる。その上で、なぜ、作者は二人の紳士の顔をもとに戻さなかつたのかを考えさせたい。この部分は、作者の動物の命を何とも思っていない紳士に対する批判と読み取ることができる。この作品に込められた思いを、伝記と関連付けて考えさせたい。

次時では、作品全体を通して作者が伝えたかったことについて考えていく。これまでに学習した宮沢賢治の考え方や、理想と照らし合わせながら、二人の紳士の心情の変化や山猫のしきを踏まえて伝えたかったことをまとめていく。宮沢賢治の理想と、それが表れているところ、そう考えた理由をノートに書くようとする。

III次では、並行読書したものの中からお気に入りの一冊を選び、II次の終わりに学習した観点でまとめる。それを、「宮沢賢治新聞」に書き表す。そして、新聞を書くことで作者の思いをより感じることができるようにしたい。

5. 学習指導計画（全13時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 教材文を通して読書し、第一次感想を書く。	<ul style="list-style-type: none">・ 並行読書から「宮沢賢治新聞」をつくることを知らせる。・ 教材文を読んで、「面白いと思ったところ」「不思議に思ったところ」「作者の思いとつながっているところ」を中心に感想を書くようとする。・ 感想を一覧のプリントにし、それをもとに交流して学習課題を設定できるようとする。・ 学習課題を教室に掲示し、学習の見通しを持て
	2	○ 第一次感想を交流する。	

	3	○ 場面を三つに分ける。	<p>るようとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現実－不思議な世界－現実という場面の転換がわかる言葉を見つけるようとする。
II 次	4	○ 二人の紳士の人物像を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 二人の紳士の言動を通して、紳士の人格や性格、考え方など人物像を読み取らせる。 ・ 「容姿に関すること」「命に対する考え方」「性格」という観点に分けて、整理する。
	5	○ 戸の言葉の意味と紳士たちの捉え方を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートを用いて戸の注文と紳士の言動を対比させながら山猫の本当のねらいを想像させ、物語の面白さに気づくようとする。 ・ 自分勝手に解釈する紳士の様子を読み取らせる。
	6		
	7		
	8	○ どうして作者は、二人の紳士の顔を元に戻さなかったのかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 料理店を見つける前の紳士たちの様子と現実の世界に戻った時の紳士たちの様子を比べ、変わったところと変わらなかったところについて読み取らせる。 ・ くしゃくしゃになった顔は元にもどらなかつたことを押さえる。
	9	○ 物語が伝えたかったことについてまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮沢賢治の理想を思い出させ、それと関連付けさせて理由を考えることができるようとする。 ・ 宮沢賢治の理想、考えと照らし合わせながら、二人の紳士の心情の変化や山猫の仕掛けを踏まえて伝えたかったことをまとめることができるようとする。
	10	○ 並行読書してきた作品から、好きな作品を選び、面白かったところ、伝えたかったことについてまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選んだ本の面白かったところをノートにまとめる。 ・ その物語が伝えたかったことをまとめる。
	11	○ 「宮沢賢治新聞」の構成を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮沢賢治の理想が表れているところ、そう考えた理由をノートに書く。
	12	○ 「宮沢賢治新聞」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ノートにまとめたことを振り返りながら考える。
	13	○ できた新聞を交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 挿絵を入れたり、見出しを考えたりする。 ・ 発表し、感想や意見を伝え合う時間を作る。

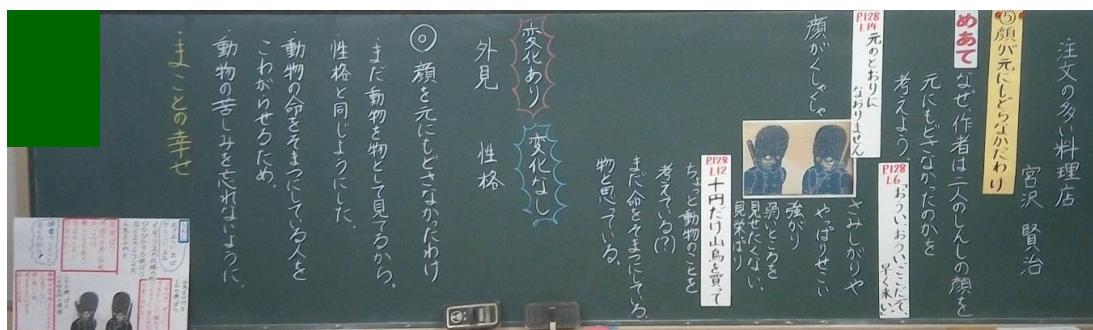
6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・ 物語全体を通して紳士たちの変化を捉え、作者が伝えたかったことを考えることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。 なぜ、作者は二人のしんしの顔を元にもどさなかったのか考えよう。
2. 教材文を読む。	○ 第六場面での紳士がどのような人物なのか考えながら読みましょう。
3. 二人の紳士の変化についてまとめる。	▼ 第六場面の紳士たちの様子を、ワークシートを用いてまとめる。 ▼ 第一場面の紳士たちと第六場面の紳士たちの様子を比べるようにする。 ◎ 紳士たちの外見は変化したが、内面は変わっていないことを押さえる。 ▼ くしゃくしゃになった顔は元に戻らなかったことを押さえる。
4. なぜ、顔を紙くずのようにくしゃくしゃにしたままなのかを考える。	★ なぜ、二人の紳士の顔を紙くずのようにくしゃくしゃにしたままなのかを考えましょう。 ▼ 二人の紳士の人物像をふまえながら書くことができるようにする。 ◎ 作者はなぜこのような結末にしたのでしょうか。
5. 書いたことを交流する。 ・ペアで	○ ペアで書いたことを確認し合い、それに対する自分の考えを話し合いましょう。 ▼ 友だちの意見を参考に、自分の考えを書き直したり、つけ加えたりするようにしても良いことを伝える。
・全体で	◎ 宮沢賢治の伝記を振り返ってみましょう。 ▼ 宮沢賢治の「まことの幸せ」と結末が関連していることを押さえる。
6. 学習を振り返る。	○ 学習でわかったことなどを書きましょう。 {評価} ・作者が二人の紳士の顔を元に戻さなかった理由についてまとめることができたか。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

本学年では、以下の三点について重点的に取り組んできた。

一点目は、物語文・説明文どちらにおいても、文章全体をとらえて考えるという学習ができるような学習計画の立案である。物語全体を通して読むことで、始めと終わりを比較することができ、変化をもたらした原因やきっかけを読み取ることができた。また、本文を根拠に自分の考えを述べる児童が増えた。

二点目は、作者の伝えたいことは何なのかを考えながら読むような読みである。このような読みを行うには、宮沢賢治の生き方や考え方を理解しなければならない。そこで、手塚治虫の伝記と宮沢賢治の伝記を入れ替えて学習した。伝記の学習では、宮沢賢治の考え「まことの幸せ」とは何なのかということを常に念頭に置くようにした。時代ごとに「まことの幸せ」とつながっている部分、考えが表れている部分を見つけていくことで、児童は宮沢賢治がどのような理想をもって童話を書き続けたのかを理解することができた。このことにより、本単元での学習で、宮沢賢治の考え「まことの幸せ」と宮沢賢治の作品をつなげて考えることができ、内容を深めることができた。

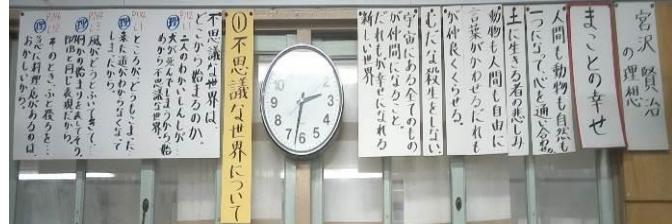
三点目は、板書の構造化である。板書の構造化を図るために、設定場面の読み取りの際、紳士の絵の上には、紳士の外見上の特徴を、右下には、紳士の性格を、左下には、紳士の動物や命に対する考え方を書くようにした。設定場面と比較することができるよう本時も同じにした。そうすることで、変わったものと変わらなかつたものは何なのか、児童は明確にることができた。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元では、「宮沢賢治新聞」を作ることで、言語活動を設定した。指導者が他の教材で作成した「新聞」を提示した。児童は興味をもって読み、「どの本にしようかな」「面白そう」とつぶやく児童もいた。その後、学習の見通しを立てる際には、児童の感想を一覧のプリントにし、感想を色分けして学習課題を設定した。自分たちで学習課題を設定することで、より意欲的に学習を進めることができた。また、Ⅲ次までの見通しをもつことができるようするために、掲示物を工夫した。子どもたちが設定した課題を掲示したことで、今、どんな学習をしているのか、これからどんな学習をするのかが一目で分かるようになった。

さらに、既習内容も掲示した。(資料①) それを振り返りながら、学習を進める児童もいた。Ⅲ次で「宮沢賢治新聞」を書く際には、読書があまり好きではない児童も、作者が伝えたいことは何なのか考えながら何度も繰り返し読み、新聞にまとめることができた。そうすることで、作品を通して作者が伝えたかったことを意識した読みへとつながった。



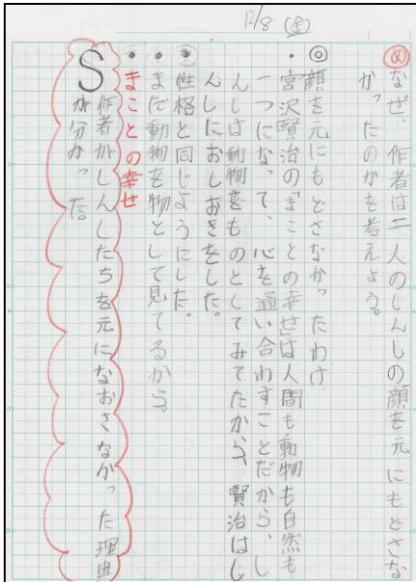
(資料①) 既習内容の掲示物)

○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

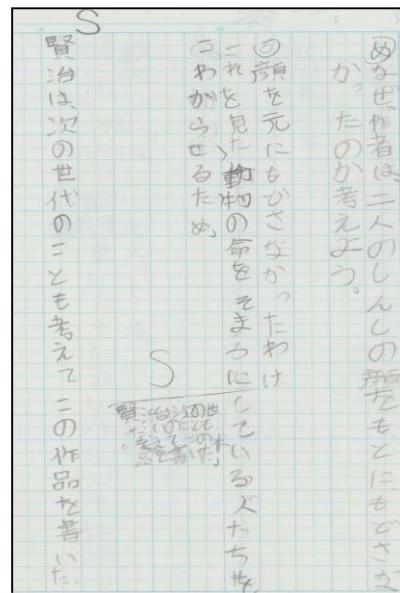
これまでの学習から、本文を根拠に、自分の考えを表現することに戸惑う児童もいるという学級の実態が明らかになった。そこで、設定場面の読み取りの際には、本文を書いたワークシートを用意した。本文の中で根拠になるところにサイドラインを引いて、

紳士の人物像を書き込めるようにした。児童は根拠を明確にし、様々なところから人物像を読み取ることができていた。そしてペアで意見交流してから、全体での交流をするようにした。そのことにより、自分の意見に自信を持ち、いつもは発表することに躊躇する児童も進んで発言する様子が見られた。その際、本文を根拠にし、紳士はどんな人物なのかを明らかにしながら自分の意見を発表できる話型を用いるように指導した。戸に書いてある言葉の意味と紳士たちのとらえ方の違いを考える際にも、同様に本文を書いたワークシートを用意した。初めは何を書いていいのか戸惑っていた児童も、「ここは料理の邪魔になるから、カフボタンや眼鏡をはずしてと言てるんだと思う。」など、戸に書いてある言葉の本当の意味と紳士の解釈を比較しながら、読み進めることができた。学習の終わりには、振り返りの時間を設けた。次の学習に向けた課題を意識できるように、分かったことや楽しかったことなどを書くように指導してきた。その結果、指導者も次時への課題の参考になった。

導者も次時への課題の参考になった。



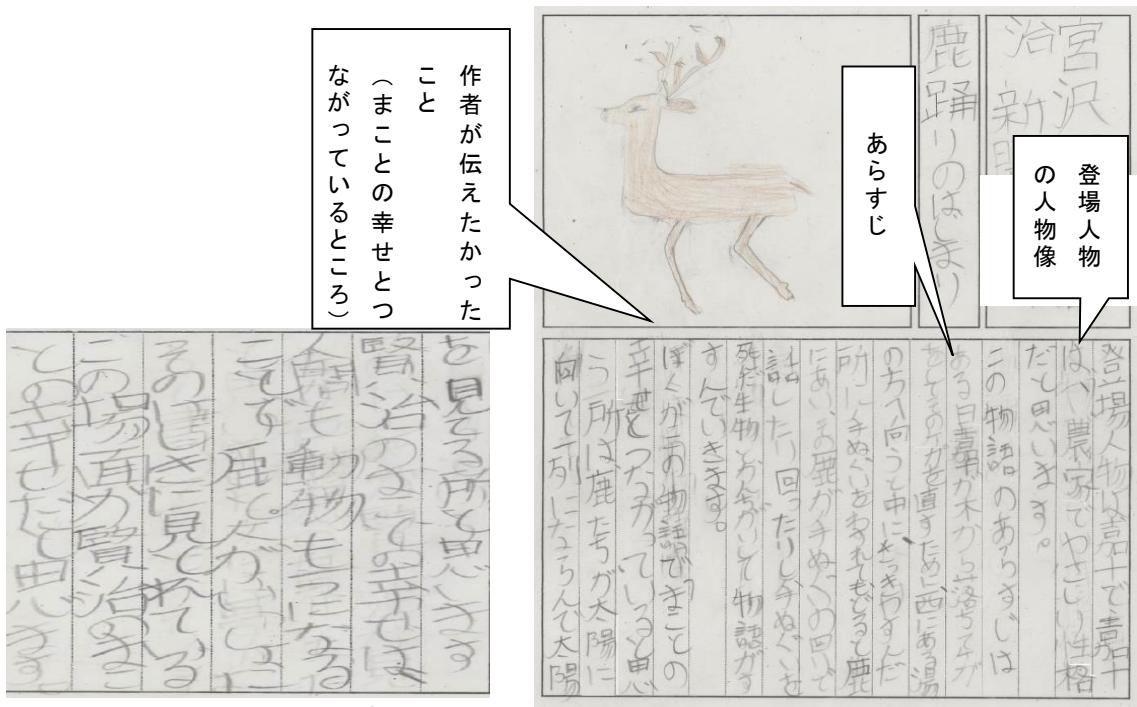
(資料② 児童が書いたノート)



(資料③ 児童が書いた振り返り)

顔をもとに戻さなかったわけについて全体で交流した際に、「動物の命を粗末にしている人たちを懲らしめるため」、「仕返し」などの意見が多くかった中、資料②のように既習内容である宮沢賢治の「まことの幸せ」と関連付けながら意見を書いている児童もいた。また、全体交流の場で、友達の意見を聞くことで、振り返りに資料③のように「宮沢賢治は次の世代のことも考えてこの作品を書いていたということがわかった」と書いている児童もいた。「○○さんの意見が分かりやすかった。」「紳士は自分勝手で周りのことを考えていない人ということが分かった。」など、自らの学びを振り返ることで、友達の良さも認められるようになり、意欲的に学習に取り組めるようになった。

Ⅲ次では、並行読書してきた中から新聞に書きたい本を選び、「宮沢賢治新聞」の作成に取り組んだ。まず、作者が伝えたかったことに関連しているところに書かれていると思ったところに、付箋を貼るようにした。付箋をどこに貼ればいいのか困っている児童には、どんな物語だったのかを聞き、変化があったところはどこなのか、なぜ主人公はこんなことをしたのかを聞くなど、個別にアドバイスを行った。次に、新聞を書く際に、どんな物語なのかを読んだ人が分かるようにするために、「登場人物の人物像」「あらすじ」を必ず書くように指導した。そして、最後に「作者が伝えたかったこと（「まことの幸せ」とつながっているところ）」を書くようにした。



(資料④ Ⅲ次で児童が書いた作品)

資料④は、「動物と人が一列になって太陽に向いて、同じ景色を見ているところが、人間も動物も一つになっている」と書いている。物語の内容と宮沢賢治の「まことの幸せ」とを関連づけて書くことができた。そのことにより、作者が伝えたかったことに迫ることができた。

最後に、書き上げた「宮沢賢治新聞」を1冊の本にして配布し、交流した。どの児童もほかの児童が書いた「宮沢賢治新聞」を興味をもって読んでいた。児童からは「同じ本でもそれぞれ書いていることが違う。」「あらすじがしっかり書かれていてわかりやすい。」「まことの幸せとなぜ、つながっているのか、くわしく書かれていて分かりやすい。」などの感想があり、宮沢賢治のほかの作品への興味へとつながっていった。

○ 図書の計画的な活用

多読につなげるために、並行読書に取り組んだ。ここでは、「宮沢賢治新聞」を作るために、宮沢賢治作の本を多数用意して、「宮沢賢治の本コーナー」を作り、読書タイムや休み時間などに気軽に読むことができるようとした。また、読んだ本の中で宮沢賢治が伝えたかったことがわかるところに付箋を貼るようにした。これにより、Ⅲ次の活動で新聞にしたい本をすぐに見つけ出すことができた。普段はさらっと読んで終わっている児童も、「宮沢賢治新聞」を作るために、理解するまで繰り返し読んだり、メモをしながら読んだりして、本のあらすじを聞くとわかりやすく説明することができていた。しかし、宮沢賢治の物語は比較的難しいものが多く、内容がなかなか理解できない児童もいた。

8. 成果と課題

- 学習課題を児童が設定し、それを掲示することで、見通しをもつことができ、学習意欲を継続することができた。
- 板書を構造化することで意見が整理され、児童の発表や交流が活発に行われた。
- ▲ ペア交流の仕方を工夫して、交流を活発にすれば、全体でより内容を深めることができた。
- ▲ 人物像を読み取ることができるように、継続して指導を行っていく。

第6学年の実践

国語科学習指導案

指導者 深田 悟

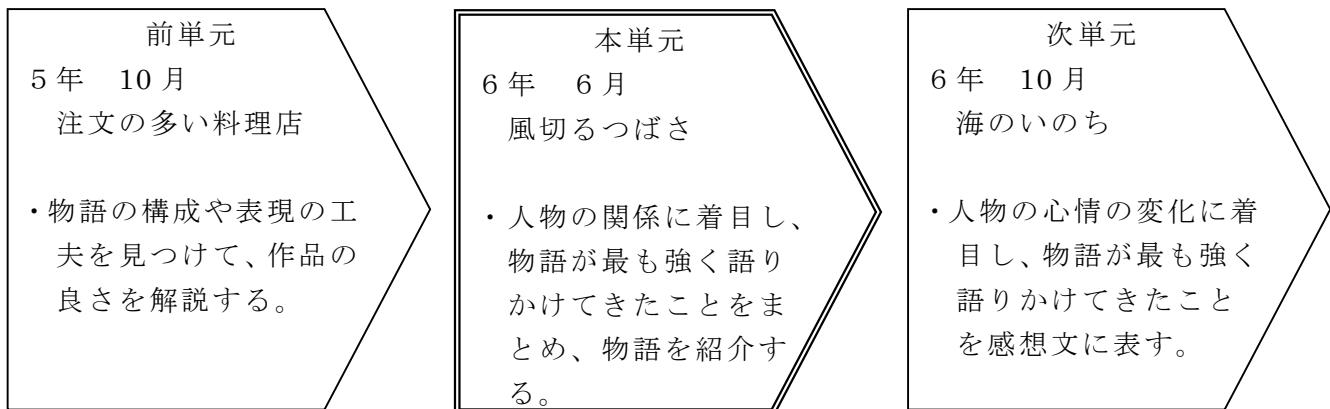
日 時 平成29年6月7日(水) 第5時限(13:45~14:30)

学年・組 第6学年2組 在籍31名

単 元 人物どうしの関係を手がかりに人物の心情の変化を考え、まとめたことを伝え合おう。

(「風切るつばさ」木村裕一 東京書籍 6年)

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 人物どうしの関係を手がかりに人物の心情を考え、読んだ物語について紹介し合うことができる。
- ・本文の叙述や実体験などと関連付けながら、登場人物の心情の変化を読み取ることができる。
 - ・人物どうしの関係を人物関係図にまとめることができる。
 - ・友情をテーマとした物語を読み、あらすじや自分の考えたことなどを紹介することができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
<ul style="list-style-type: none">・人物どうしの関係をとらえながら、中心となる人物の心情の変化を読もうとしている。・自分のお気に入りの本を読もうとしている。	<ul style="list-style-type: none">・中心となる人物の心情の変化を、人物どうしの関わりを考えながら読んでいる。・まとめた考えを友だちと伝え合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。	<ul style="list-style-type: none">・物語を読んで考えたことを、本文の叙述と自分の感想との関係を考えながらまとめている。・登場人物の心情の変化を読み取ったことを、人物関係図にまとめることができている。	<ul style="list-style-type: none">・大事な言葉や表現の工夫などに気づき、人物の心情を考える手がかりにしている。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、読書タイムには静かに本を読むことができている。しかし、読書が好きでない児童も多く、読んでいる本が怖い話やウォーリーを探せなどの物語ではない本であったり、はだしのゲンのようなマンガ本を読んでいたりする。そんな子たちにも登場人物の心情や心の動きが読み味わえるような本に親しめるようにし、読書の楽しさを知らせていきたい、学級文庫に物語コーナーを設置した。その結果、手に取って見る児童は増えてきたが、読み味わうというところまでには至っていない。

4月に学習した「サボテンの花」では、サボテンと風の考えを比べながら読み、感想を話し合った。風とサボテンの会話からサボテンの生き方について考え、発表する児童もいた。しかし、自分の考えをもつことができなかったり、考えや感想をもっていてもうまく表現することができなかったりする児童もおり、自分の考えを話すことに苦手意識をもっているように感じられた。

そこで、「イースター島にはなぜ森林がないのか」の学習では、お互いの考えや意見を発表する際に、ペアで相談する時間を作ったり、グループで発表したりするなど、自分の考えに自信をもてる場を設定してきた。少しずつ自分の考えを話し合おうとする児童が増えてきているが、まだまだ不十分であり、今後さらに広げていきたい。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C読むこと」の指導事項エ「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」、指導事項オ「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」とする。この力をつけるために、「登場人物の心情の変化を中心に物語の感想をまとめ、伝え合う」という言語活動を位置づける。

本教材は、中心となる人物の心情が心内語に多く表れており、心情の変化がとらえやすい。さらに、登場人物が限られており、それぞれの関係や行動が中心となる人物に大きく影響を与えることが分かりやすく、人物関係図を用いての学習も行いやすい教材文である。また、中心人物であるクルルは、仲間を信じることができなくなり、自己嫌悪に陥っていく。逆に、その仲間であるカララは、クルルを犯人扱いする仲間に、何も言えずに黙ってしまう。それぞれの思いのすれ違いである本教材の展開は、6年生の時期の子どもにも共感を得やすいのではないかと考える。以上のことから、物語の内容を十分に理解した上で、自分はどのように物語をとらえたかを表現する活動を行うのに適した教材である。

【指導観】

本単元では学習のまとめとして、自分のおすすめの本を紹介するという見通しをもたせて取り組んでいく。そのため、本単元に入る前に読書環境を整え、教材文を読み進めることに並行して、並行読書にも取り組ませる。同じ作者が書いた「あらしのよるに」シリーズや、草野たき作「ハッピーノート」など、人物と人物の関係を描いた物語を用意する。そして、読んだ本を読書貯金という形で記録し、第Ⅲ次の学習につなげていく。

第Ⅰ次では、初発の感想を書く。「心に残ったこと」「共感できること」「登場人物に聞いてみたいこと」などの観点を示し、初発の感想を交流する。初発の感想の中から読みの課題を設定し、学習意欲を高めるとともに、学習の見通しをもたせるようにしたい。

第Ⅱ次では、まず、「クルルが飛べなくなった理由」について考える。物語冒頭で、周りから仲間殺しの犯人のように扱われるクルル。また、友だちのカララが周りに交じっ

ていることがクルルに大きな影響を与えたことは子どもたちにも想像しやすく、もしかするとこういった経験をした子がいるのではないかと考えられる。そこで、似たような経験があるか、その時の気もちはどうかなどを思い返しながら、クルルが飛べなくなつた理由をさらに具体的に考えさせたい。そして、登場人物の相関関係について人物関係図を作成する。「クルル」→「群れのみんな」・「カララ」は「仲間」「友だち」などの言葉で表されるだろう。逆に、「群れのみんな」→「クルル」は、「仲間殺しの犯人」「いかりの持つて行き場」などと表されることが予想される。

本時では、第三場面以降を全文との関連から読み進め、「クルルが飛べるようになった理由」を考える。自尊感情を失ったクルルにカララが以前と変わらず接してくれたこと、一緒にいてくれたことなどの理由も容易に想像できると考えられる。前時の学習をふまえ、実体験などを交えながら考えをまとめることができるようにしたい。その上で、カララが仲間の中で黙っていたのはなぜかなどについても考えるようとする。また、本時の最後にはカララのクルルへの心情を人物関係図に書き込んでいく。

次時には「風切るつばさ」を読んで、物語全体を通して登場人物の心情の変化について改めて考え、感想を書く。登場人物の心情が表れていると思う大事な言葉や表現、自分の体験などを根拠に、クルルの心情の変化をまとめていく。題名「風切るつばさ」の意味などを考えながら、児童がこの物語の感動の中心をとらえることができるようになりたい。また、それぞれの考えを互いに伝え合い、自分との違いを受け入れたり、友だちの考えの良さを認めたりしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることにつなげていきたい。

第Ⅲ次では、並行読書をしていた他の作品での登場人物の心情の変化や作品の感想を紹介し合う会を開く。図書の時間や読書タイムなどを活用しながら並行読書を行うようになる。それぞれの登場人物の人物関係図をもとに発表することで、それぞれの読みの相違点や共通点などに気づくことができるようになりたい。

5. 学習指導計画（全8時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説等）
I次	1	○ 教材文を通読し、第一次感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> 教材文を読んで、心に残ったことなど第一次感想を書くようする。
	2	○ 第一次感想を交流する。 ○ 学習の見通しを立てる。	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの読みに違いがあることに気づくことができるようする。 第一次感想の交流を通して、読みの課題を見つけるようする。
II次	3	○ クルルが飛べなくなった理由を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 実体験や叙述をもとにクルルが飛べなくなった理由について話し合うようする。
	4 本時	○ クルルが飛べるようになった理由を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いをもとにして、人物関係図をかくようする。 前時に作成した人物関係図や実体験、叙述をもとにして、クルルが飛べるようになった理由を話し合う。
	5	○ 自分の感想をまとめめる。	<ul style="list-style-type: none"> カララのクルルへの心情は事件前後で変化していないことを押さえ、その誤解が解けたことで、飛べるようになったことをまとめることができるようにする。 作成してきた人物関係図や実体験を交えながらまとめられるようする。

III 次	6	○ 並行読書してきた作品から、登場人物の心情の変化や作品の感想をまとめること。	・ 「風切るつばさ」で書いたことをもとに、他の作品でも書くことができるようになる。 ・ 読みの共通点や相違点を明確にするとともに、それらの視点で交流の感想をまとめようとする。
	7	○ 書いたことを交流する。	
8			

6. 本時の学習

① 本時の目標

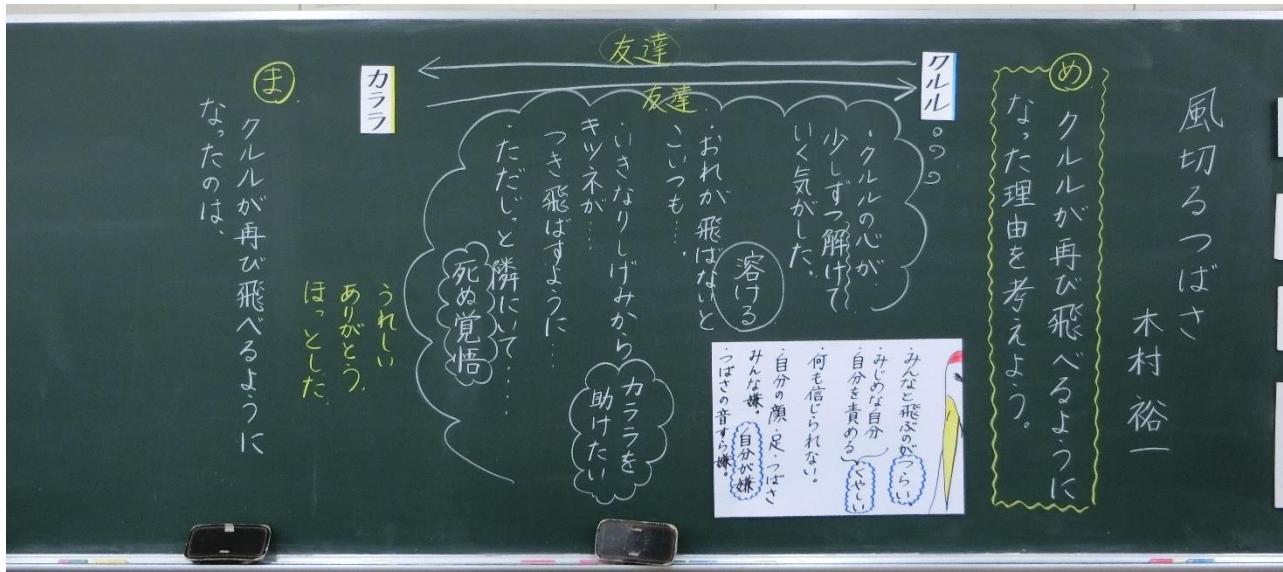
- カララへの誤解が解けたことから、クルルが飛べるようになった理由についてまとめることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 人物の関係を振り返る。 2. 本時の課題を確認する。	・ 前時の内容を振り返るようにする。 ▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。
クルルが再び飛べるようになった理由を考えよう。	
3. 教材文を読む。	○ クルルが飛べるようになった理由を考えながら、物語を読みましょう。
4. クルルが再び飛べるようになった理由を考える。	★ クルルが再び飛べるようになったのはなぜでしょうか。それが分かる本文を抜き出し、理由も書きましょう。 ▼ クルルの心情の変化について表されている言葉を本文から抜き出し、理由も書くようする。
5. 互いの考えを明確にするために、書いたことを交流し合う。 ・ペアで ・全体で	◎ 実体験などをふまえながら、書くことができるよう助言する。 ○ ペアで書いたことを確認し合い、それにに対する自分の考えを話し合いましょう。 ▼ 互いの読みについて認め合うことができるようする。 ◎ 友だちの意見を参考に、自分の考えを書き直したり、付け加えたりするようにして良いことを伝える。 ▼ クルルのカララへの誤解が解けたことが大きな理由であることについて押さえる。 {評価} ・ カララへの誤解が解けたことから、クルルが飛べるようになった理由についてまとめることができているか。

6. 人物関係図に関係を書く。

- ★ カララのクルルへの心情をどうまとめていけばよいでしょうか。
- ▼ カララのクルルへの心情は変化していくないことを押さえる。



7. 指導を終えて

(1) 学年での取り組み

学年当初より「音読カード」を活用し、自分のめあてを決めて本を読む取り組みを継続して行ってきた、その中で、児童のひとり学習の一つとして物語のあらすじ文や、説明文の要旨が読み取れるようにしたいと考えた。

言語活動のまとめとして、児童が自分のおすすめの本を紹介する。そこで、意欲的に読書に取り組めるように「読書貯金」という形で記録に残せるようなものを用意した。それに合わせて、物語文を中心とした図書コーナーを学年のフロアに設けることで、第3次のオススメの本を紹介するという見通しをもつとともに、読書への関心を高められるようにした。

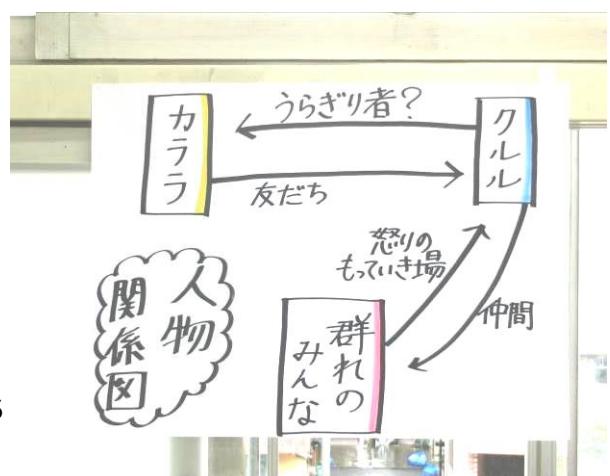
児童は日常的に理由や状況をうまく説明できず、簡単な言葉でしか感想を伝え合うことができなかった。本単元でも初発の感想では、「～がかわいそう」や「～は優しい」など直感的なものが多かった。そこで、授業をすすめていく中で人物関係図を用いて読みを深めていく取り組みを行った。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

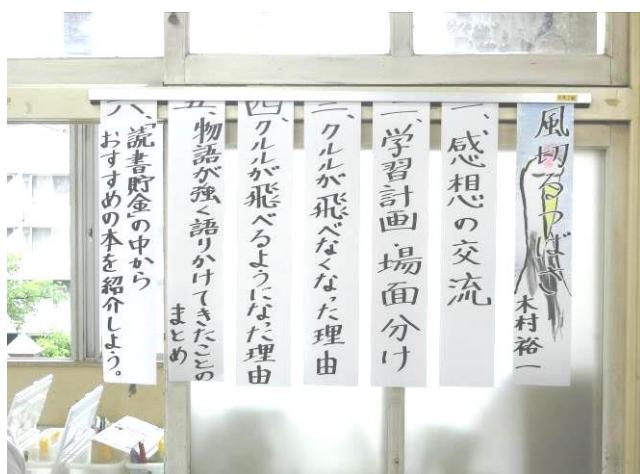
本単元では「自分のおすすめの本を紹介する」という言語活動を行った。

初発の感想をもとに、学習の課題を短冊にして教室内に掲示することで、学習に見通しをもって取り組むことができた。また、人物関係図を用いることで、それぞれの登場人物からの視点



を考えられ、クルルのカララへの心情が変化してきたことを多くの児童が記述することができていた。

人物関係図を用いるにあたっては、クルルとカララ、そして周りの仲間を考える。クルルとカララのどちらかに焦点をおくか、双方の気持ちに寄り添うかなど児童各々の思いに経験を合わせて考えるなど教材研究を深めた。



(資料② 短冊にした学習の課題)

○ 意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

物語文では、中心人物の気持ちや行動の変容をどうとらえさせるかが大切であるため、クルルの仲間との関係やカララとの関係を、毎時間課題に沿って話し合うことを大事にした。人物関係図を用いて各々の登場人物のお互いに対する気持ちを整理したうえで話し合いをした。ワークシート上で自分の読みを書き込んでおくことで、話し合いに積極的に参加することができた。また、友だちの考えと自分の考えを比べながら聞いたり、考えなおしたりするこ

とができた。また、内心語にも注目するようにしたことで、登場人物の気持ちを考える根拠につながった。本時では、クルルが再び飛べるようになった理由をクルルの立場に立って考えることで、心の中での葛藤を共感し、舞い戻ってきた後に何も言わずじっと待ってくれているカララへの気持ちの変化をクルル目線で読み取るに重点をおいた。

クルルの気持ちが「溶ける」ではなく「解ける」になっていることから、カララに対する誤解が解けた様子を言葉で表現されていることに気づき、全体で交流することで、読みを深めることにもつながった。

また、第Ⅲ次の「おすすめの本紹介カード」の作成の際には、本单元に入るころから続けてきた「読書貯金」をもとにすることで、スムーズに活動に書き出すことがで

第Ⅲ次では、自身が紹介したい本を「おすすめの本紹介カード」にまとめ、発表した。カードには、題名、あらすじ、おすすめポイントを書くようにした。「読書貯金」に、おすすめポイントを記録するようにしてきたことで、紹介カードを書く物語を決める参考にすることができた。

また、紹介の際にあらすじも一緒に発表することで、物語の大体が分かり、聞いている児童も関心をもって聞くことができていた。



(資料③ おすすめの本紹介カード作成の様子)

きた。紹介し合うという発表の場では、あらすじを話すことで物語の大体を友だちに伝えることができた。友だちにおすすめするという話し方の工夫により、自分が読んだことのある本であっても、初めて知った本であっても、とても興味深く聞き入っていた。

毎時間心情の変化をペアで交流することで、友だちの良い所や考えを参考にして書き加える児童もいた。しかし、中には交流の仕方が分かっていない児童もいたので、全体での共通理解をもっと図るべきであった。

○ 図書の計画的な活用

児童は、読書タイムや時間の余裕があるときによく読書をしている。しかし、長編の読みものや指導者側の意図する本を選ぶことは少ない。そこで今回の学習にあたり、人物関係を重視した物語を中心に読んでみようと声をかけた。

第Ⅲ次での「おすすめの本紹介」に向け、本校の図書室から同作者の「あらしのよるに」シリーズや、草野たき作「ハッピーノート」などの人物と人物の関係を描いた物語作品を、学年のフロアに図書コーナーとして設置した。読んだ本を「読書貯金カード」に記録することにより、第Ⅲ次で使用する「紹介カード」を作る際の参考にしてほしいと考えた。結果、指導者の意図する本を読んだり、いつもとは違ったジャンルの本を読んでみたりする児童も見られた。

たくさんの本を用意したことで、児童の学習意欲を高めることにつながった。また、「読書貯金」を増やしたいという気もちから読書に前向きになる児童も多く見られた。

8. 成果と課題

- 学習過程や人物関係図の掲示により、見通しをもって学習に取り組めた。
- ペアでの交流を行うことにより、友だちの意見を参考にして、自分自身の考えに付け加えることができた。
- 図書の計画的な活用により、児童の学習意欲が高まった。
- ▲ 指導者の読みを答えとして捉えさせるのではなく、児童それぞれの考えを深められるような指導の工夫をしていく必要がある。

なかよし学級の実践

生活単元学習指導案

指導者	池原	ひふみ
	井辺	政夫
	佐藤	久子
	鈴木	舞子
	住平	早紀

日 時 平成 29 年 11 月 30 日 (木)

第 2 校時 (9:45~10:30) ~ 第 3 校時 (10:45~11:30)

学年・組 なかよし (在籍 26 名の内なかよし①通級児童 10 名)

場 所 なかよし教室①

単 元 「買い物ごっこをしよう」

1. 単元目標

- ・ ポップコーンができる過程を興味を持って観察し、わかったことや感じたことを表現できる。
- ・ 順番を待ったり役割を交代したりしながら友だちと一緒に、楽しく活動することができる。
- ・ 日常生活の中で使えるように、人とのかかわり方、文字や数・お金の計算などそれぞれの児童のニーズにあった活動をすることができる。

2. 指導にあたって

【児童観】

なかよし学級在籍の児童は、個々の障がいや発達段階が異なるため、課題も一人ひとり異なっている。なかよしに学習にくる児童は算数・国語の教科の場合が多い。中には、音読や漢字学習が苦手だったり、人とのコミュニケーションに困り感を感じたりしている児童もいる。なかよし学級での算数科学習では、学年の単元にそって学習を進める児童と本人の発達段階にあわせた課題を学習する児童がいる。それぞれの児童のニーズにあわせて、算数のほか音読・読解・漢字学習・百人一首・ソーシャルスキルかるたなどおりませて支援し指導をしてきた。一人学習もできるように児童一人ひとりの課題に応じてプリントを用意し、児童は「チャレンジ de ゴー」「コグトレ」の 1 日 2 枚ずつこなしている。また、月曜日「きのう、何してた?」火曜日「絵本の読み聞かせ」水曜日「ディベート」木曜日「なかま集め」金曜日「言葉集め」等曜日ごとにレッツスキルアップ(小集団学習)に取り組み、ソーシャルスキルを高めてきた。個別学習では児童のニーズに合わせた内容をするほか、お金の絵で計算するプリントや教材用のお金でやりとりする練習を進めている。

【単元観】

昨年度、「買い物ごっこをしよう」という活動をした。小集団活動で自分の役割をやりとげ達成感を味わったり協力しあうことの楽しさを感じたりして、社会参加への意識やコミュニケーション力を高めるきっかけづくりができた。一方ふりかえりをして反省点や課

題も見えてきた。また計算はできるが生活の中で使われるお金の計算は苦手という児童もいる。そこで昨年の反省点や課題をふまえ、児童一人ひとりのニーズに応じた目標や役割分担を明確化して、今年度も「買い物ごっこをしよう」という単元を 設定し活動することにした。

昨年はポテトチップスを使って「買い物ごっこをしよう」を設定したが、今回は学習園で栽培したポップコーン用のとうもろこしの実を用いて、ポップコーンを作る過程を観察し、できあがったポップコーンを使ってやることにした。2つのグループで活動するのは昨年同様だがグループの中で店番の前半後半を決めたり、店の名前を考えさせたりの話し合いは本時までにさせたいと考えた。お店の準備の時も一人一役割でできる活動を用意していくようにする。

買い物活動には自立した社会生活するために身につけさせたい活動が多くふくまれる。また、お客と店員になって活動することが買い物活動への興味関心を高め、人とかかわるコミュニケーションの力を育むことにつながると考えた。さらになかよしの学習園でとれたとうもろこしの実をポップコーンにしてお店屋さんをすることが、買い物ごっこを楽しく進んでとりくむ意欲づけになるとを考えた。ポップコーンを作る際は、衛生面や火の取り扱いでの安全面に十分配慮して行うようにする。

学習の始めは個別学習「チャレンジ de ゴー」「コグトレ」をする。次に絵本「ポップコーンのでき方」を紹介し、その後「ポップコーンのでき方を観察」し「買い物ごっこをしよう」をするように設定した。児童には学習でやるということを意識させたいので「買い物学習をしよう」と提示していく。

3. 学習指導計画（全3時間）

次	時	学習活動	支援のあり方
I 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 買い物学習することを知りそのやり方の説明を聞く。 ○ 店員とお客の言葉やお金のやりとりの練習をする。 ○ グループに分かれ店の開店準備に向けて話し合い活動をする。 ○ 店の名前や値段などを紙に書いて貼っていく。 ○ 絵本の読み聞かせを聞く。 ○ ポップコーンのできる過程を観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2つのグループをつくりそれぞれのお店を自分たちで協力しあって準備することが理解できるようにする。 ・ 話し合いがスムーズに進行するよう、司会役を決め進行表や伝え方メモを用意する。 ・ 一人一役割があるように活動内容を考え用意する。 ・ ルールや役割などを掲示し見通しが持てるようにする。 ・ 絵本が見えやすいように座る場所に配慮する。 ・ 種の色や形・大きさ・音などに注目するよう伝えてから観察を行うようにする。 ・ ポップコーンができる前とできた後を比較しやすいように工夫する。 ・ 一人一役割があるように活動内容を考

3 本 時 (2)	る。	え用意する。 ・ 協力できたことを振り返り、みんなで活動する楽しさに気づかせる。
--------------------	----	---

- ・ 買い物ごっこの概要
- ・ ポップコーンのお店を2店開く
- ・ 前半後半で店員とお客の役割を交代
- ・ ポップコーン1皿10円。1回に3皿まで買える。
- ・ 買い物のお金は一人50円。
- ・ 両方のお店に買い物に行く。

4. 本時(1) 学習

① 本時(1) の目標

- ・ ポップコーンのでき方を観察し、友だちの話をしっかりと聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができる。
- ・ 協力して買い物学習の準備をすることができる。

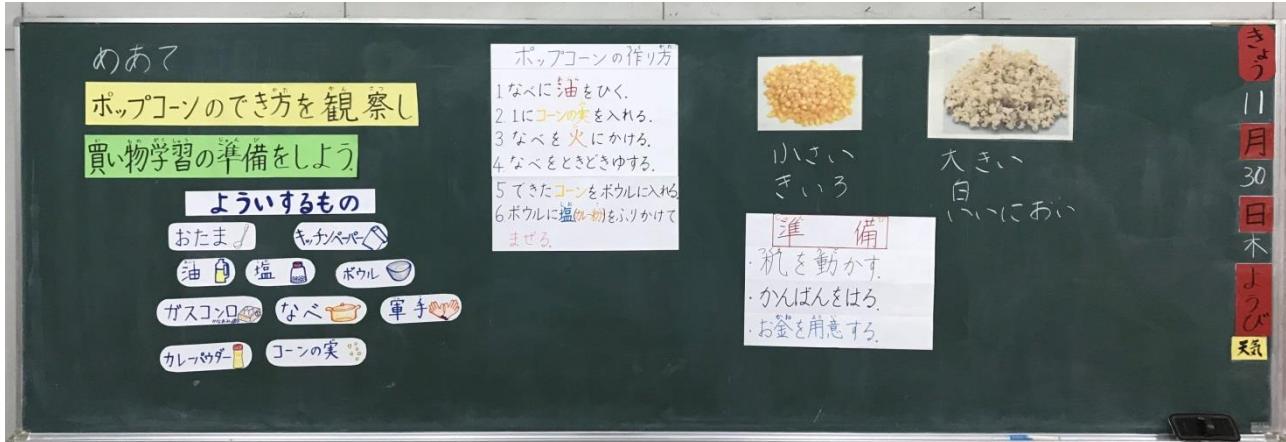
② 本時(1) の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 個別学習をする。 ・「チャレンジ de ゴー」「コグトレ」に取り組む。	○ 「チャレンジ de ゴー」「コグトレ」の後「買い物学習」(準備・本番)することを伝える。 ▼ それぞれに必要な声かけや支援をしていく。
2. 絵本の読み聞かせを聞く。	○ 「ポップコーンのでき方」に関する絵本の読み聞かせをする。 ▼ 絵本が見えやすいように指導者の周りに集まるよう声かけをする。
3. 本時の学習のめあてを確認する。	○ 学習のめあてを全員で読んで確かめる。 ▼ 板書や掲示物を活用していく。

ポップコーンのでき方を観察し、買い物学習の準備をしよう。

4. ポップコーンのでき方を観察する。	○ 2つのグループに分かれ、ポップコーンの種からポップコーンができるまでを観察させる。 ◎ 種の色や形・大きさ・音などに注目させる。 ◎ ポップコーンができる前とできた後を比較させる。 ◎ 観察して気がついたことを発表させる。 ○ 机を運ぶ・店の看板をはる・おつりの準備をさせる。 ▼ 一人一役割できるようにする。 ▼ 必要な準備物を用意しておく。 ○ 早く準備ができたら、買い物のやり取りを練習させる。
5. ポップコーンを売る準備をする。	

6. 活動の振り返りをし、次時の予告を聞く。	<p>○ 活動で頑張ったことやよかったですを評価し、次時の活動に意欲を持たせる。</p> <p>{評価}・グループで協力して買い物学習の準備ができたか。</p>
------------------------	--



5. 本時（2）の学習

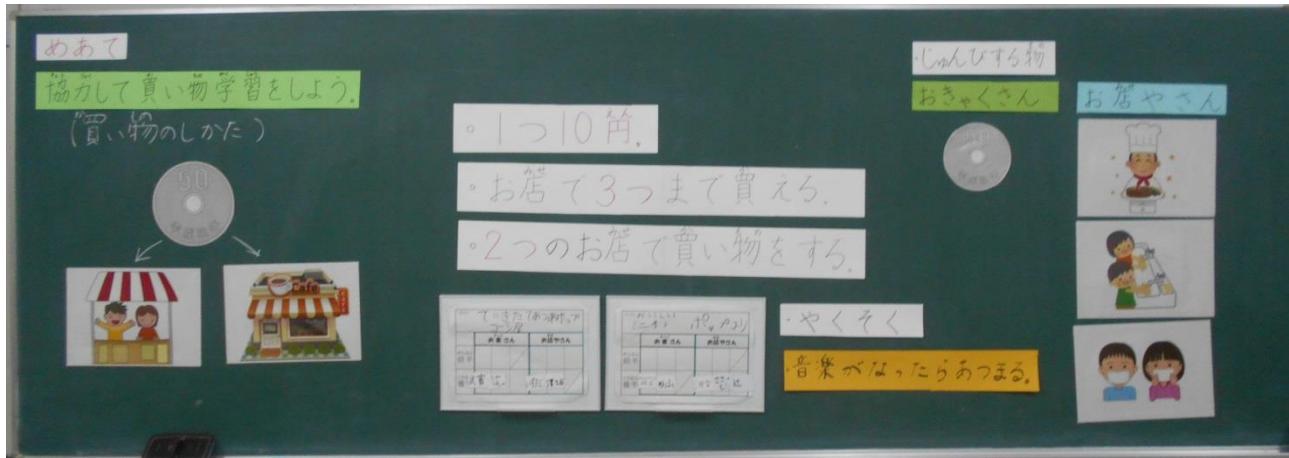
① 本時（2）の目標

- ・ お金の計算や使い方に慣れることができる。
- ・ 店員とお客様に分かれて協力して買い物学習することができる。

② 本時(2)の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 買い物活動のやりかたやめあての確認をし準備をする。	<p>○ 本時の課題を掲示し、みんなで読んで確認させる。</p> <p style="text-align: center;">協力して買い物学習をしよう</p>
2. お店を開店させ買い物活動を始める。	<p>○ 望ましい言葉使いを確認させる。</p> <p>▼ 前半の役割分担を確認する。</p> <p>▼ 店員とお客様に分かれぞれぞれ準備をさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 店員は手を洗い、マスク・帽子をつける。 ・ お客様は 50 円を用意する。 <p>○ お客様は両方の店に買い物に行かせる。</p> <p>○ 「いただきます」をして食べる。いすに座って食べたらまた買い物に行く。</p> <p>▼ 交代した店員の手洗い、マスク・帽子を確認する。</p>
3. 時間がきたら役割を交代する。	<p>▼ 支援者は店員やお客様の児童の状況に応じて支援していく。</p> <p>▼ 先生や支援者も 50 円持って買い物に行き、店員やお客様の児童とやりとりをする。</p>

<p>4. 買い物活動を終了して 振り返りをする。 あと片づけをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ めあてを読み、友だちと協力できたところを見つける。 ○ 自分のがんばったことや、友だちのよかったですを発表させる。 <p>▼ 振り返りの項目を用意し具体的に思い出せるようにする。</p>
---	--



6. 指導を終えて

(1) 本実践の考察

本時（1）では「ポップコーンのでき方を観察し、買い物学習の準備をしよう。」をめあてに設定した。本時までに「ポップコーンのでき方」に関する絵本の読み聞かせを続けてきた。本時では「あまいとうもろこしとカタイトウモロコシ」のタイトルの絵本を読み聞かせた。読むスピードや抑揚に注意して、児童の興味関心を引き付けるように配慮した。その結果、朗読に対して児童は真剣に聞き入っている様子であった。（資料①）

ポップコーンのでき方を観察する際には、二つのグループに分け、種からポップコーンができるまでを、比較しやすいように種の色や形・大きさ・音等観点を指示して観察させるようにした。児童は指示された観点に注意して、ポップコーンができる前と後を比較して、「色がちがった。」「小さかったのがとても大きくなった。」「種がはじける時の音がとても大きかった。」等気づくことができていた。その後、机を運ぶ・店の看板をはる・おつりの準備をする等一人に一つの役割、分担にしたがって協力して準備することができた。その際も、高学年児童が、低学年児童に対して優しく接している様子が見られたのはよかったです。

本時（2）では、「協力して買い物学習をしよう」というめあてを設定し取り組んだ。「協力する」という言葉がわ



（資料① 絵本の読み聞かせ）



（資料② ポップコーンの準備）

かりににくい児童もいるため、「使うといい言葉」（あったか言葉）「よくない言葉」（ちくちく言葉）を伝えた。あったか言葉・ちくちく言葉を言われたとき、どんな気持ちがするのかを考えた後、言われて嬉しい「あったか言葉」をたくさん使うように促した。

実際に、なかよしの学習園で栽培したポップコーン用のとうもろこしを使い、お店を2店開き買い物学習をした。前時に作ったポップコーンを使用した。（資料②）

食べることがメインにならないよう、1皿10円で、1人5皿まで買えると設定した。二つのお店（塩味・カレー味）に買い物に行くため、一つのお店で買えるのは3皿までとした。50円玉を持って買い物に行くため、おつりのやりとりができるようにした。

また、お金をやりとりする際に支援が必要な児童に対しては、店員とお客様のセリフカードやおつりの早見表を用意した。このことによりセリフカードを見ながら言う児童や自ら呼び込みをする児童もいた。（資料③）

見に来ていた先生方にも50円を持って買い物に参加してもらった。先生に「2皿ください」と言われ「20円です」と返事をしたものの、わざと30円出され受け取ってしまうケースも見られた。マニュアル以外の対応も経験することができた。お金の計算や一皿へのつぎわけ、コミュニケーションの力など児童によって課題が違うので一人一人、どの課題に重点をおいているのかを事前になかよし担任の間で確認した。

最後にふりかえりの時間を設けた。本時の最初に確認した、「協力する」ときに「使うといい言葉」（あったか言葉）を使った児童が多かった。普段は10人そろって活動する機会がないため、貴重な異学年の交流の場になりコミュニケーションの力を育むよい機会となった。

7. 成果と課題

- 昨年はポテトチップスを使った学習を経験しているので見通しをもって参加できた児童が多かった。
- ルール確認等もスムーズにでき、お店やさんも盛り上がった。
- 一人に一つの役割を事前に決めておくことで児童も活動しやすかった。
- 文字や数・お金の計算・対人関係などそれぞれのニーズに合った活動をすることができた。
- ▲ 見通しを持ちにくかった児童への対応を考えていく必要がある。
- ▲ 個別の課題の個人差が大きいので、共通して楽しく学習できる教材ややり方をさらに考えていく。
- ▲ 机に座っての個別学習とともに、コミュニケーションの力を高める話し合い活動や、協力・協調性を培う体験型学習など、小集団での活動を今後も進めていく必要がある。



（資料③ お金のやり取りの様

V 研究のまとめと課題

以下の点において、児童の高まりを見出すことができた。

- 児童の興味関心を高めるために、学習計画を工夫した。1年生の「中心人物に手紙を書く活動」、2年生・4年生の「読書会」、3年生の「本の帯作り」、5年生の「宮沢賢治新聞作り」、6年生の「おすすめの本を紹介する活動」など、児童が「やってみたい」と思えるような言語活動を設定した。また、4年生・5年生のように初発の感想をもとに、児童自身が読みの課題を設定し、学習を通して、それらを解決していくことで、意欲を持続させながら、学習を進めることができた。
- 全ての学年で、既習内容や学習のめあてを掲示するなど、学習環境を整えてきた。これにより、児童は見通しをもって学習に臨むことができ、1時間の流れを円滑にすることができた。また、既習内容を掲示することで、いつでも振り返ることができ、前時までの学習内容を踏まえた考えを形成することができた。
- 常に本文を意識して学習を進めるようにした。3年生のように、中心人物の気持ちが変化した大事な一文について考えたり、5年生のように、作者の考えが表れている本文を探したりすることで、本文の言葉をじっくりと読み、それを根拠に考えを述べることができた。また、1年生のように、本文の表現を用いて手紙を書くなど、語彙を増やすこともできた。
- 前年度より、学校全体で話型とハンドサインを統一した。話し合いのルールを継続して指導していくことで、児童が話し合いに積極的に参加できるようになった。これにより、互いの意見の相違点や共通点が明確になり、活発に意見交流ができるようになった。また、必要に応じて、効果的にペアでの話し合い活動を取り入れることで、児童ぞれぞれの気づきがあったり、学習の深まりが見られたりした。
- 「読書会」「本の帯作り」「新聞作り」「本の紹介」といった活動では、学校図書館や地域の図書館などの利用を積極的に行った。いつでも本を手にとって読むことができるような環境を作ることで、読書に対する抵抗も少なくなり、意欲的に本を読む姿が見られるようになった。国語の時間だけでなく、地域の「えほんばたけ」や図書委員会の読み聞かせなどで本と触れ合う機会を増やしたり、図書館支援員を配置したりすることで、本に興味を持つ児童が増えた。

今後の課題は、次の2点である。

- ▲1時間の学習内容を精選し、その時間に何を考えさせたいのか、どんな力を身に付けさせたいのかを明確にするとともに、主発問を工夫していく必要がある。また、その主発問に向かうためには、どのような補助発問が必要なのかも考えていく。
- ▲話型やハンドサインを用いることで、全体での意見交流に対する意識は高まってきた。しかし、全体交流の前には、ペアトークしか行われていない。そこで、グループやトリオなど、いろいろな交流の形態を取ることができるようにしていく。

お わ り に

本校の「豊かな人間性とたくましく生きる力を育てる教育実践を推進する」という教育目標を実現するために、言語活動の充実を目指して研究を行っています。一昨年度より研究教科を国語科とし、今年度は昨年度に引き続き研究目標を「豊かに学ぶ子どもを育てる～読む能力の高まりを目指して～」と定め、主体的に学習に取り組み、生涯にわたって学び続けることのできる児童を育てるために、めざす子ども像として以下の3点を設定しました。

- ・自信をもって学習に取り組む子。
- ・主体的に取り組むことができる子。
- ・学び続けることのできる子。

研究の視点として、①学習意欲の向上を図る言語活動の工夫、②意見交換を活性化させるための指導方法や指導材の工夫、③図書の計画的な活用を掲げ、研究を重ねてきました。それぞれの研究過程や成果は本文に記したとおりです。

各学年を中心とした6つのグループをつくり、全学年で研究授業を実施しました。また、指導助言者として、大阪市教育センターより先生吉川さわ子・松岡里美先生、大阪市小学校教育研究会より国語部長の清岡延吉先生をお迎えし、活発な意見交換や、非常に有益な指導助言を頂戴することができました。おかげをもちましてここに研究紀要をまとめることができました。ご高覧をいただき、ご批正・ご指導をいただければ幸いです。

最後になりましたが、研究を進めるにあたり、きめ細やかなご指導をいただきました吉川さわ子先生・松岡里美先生・清岡延吉先生をはじめ、多大なご支援・ご指導賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

教頭 高橋 司

《 研 究 同 人 》

柾木 弘司	高橋 司	香崎 光宙	中西 康恵	尾小谷 純也
香西 和幸	石川 知奈実	上田 学	尾山 智晴	菊池 順子
井田 雄太	高見 あずさ	青木 祐樹	前川 裕美	戸津川 沙織
堀井 敦史	上田 美和子	井上 正章	杉浦 明日香	中山 美紗
佐藤 優	深田 悟	柳川 知子	渡口 理子	田中 日龍
須藤 健郎	池原 ひふみ	井辺 政夫	佐藤 久子	細見 典芳
鈴木 舞子	住平 早紀	井原 夕貴	伊藤 泰子	高橋 愛美
井川 照雄	川本 和代	迫 友美	石川 広美	